

第5グループ【国際化・文化分野】

みなとタウンフォーラム・第5グループ 国際化・文化分野

令和2(2020)年3月23日

みなとタウンフォーラム第5グループ [メンバー]

石川 結万	岩端 由美子	宇都宮 和美
杉浦 亮介	中村 絵里子	丹伊田 杏花
原 鐵二	森 一	

※メンバーは五十音順



提言にあたって

第5グループ【国際化・文化分野】

第5グループでは、国際化と文化振興について検討を行いました。

参加メンバーが共通して認識している港区の特徴としては、多くの大使館が立地していることや、たくさんの外国人が暮らし、訪れていることなどが挙げられました。その特徴を、港区をよりよくすることに生かすため、国際化に関して2つのテーマ、文化振興に関して1つのテーマを議論し、提言をとりまとめました。

国際化については、「国際都市の実現」と「外国人との相互理解の促進」をテーマとして提言を行いました。いずれも外国人が安心感を持って、日本人と共に気持ちよく暮らすことができることを理想としています。そして、「国際都市の実現」では交流促進という観点から、「外国人との相互理解の促進」では文化の理解とルールの受容という観点から議論を行いました。

文化振興に関わるテーマは「文化・芸術

に触れる機会の創出」です。関心の大小にかかわらず文化芸術に触れ、誰もが楽しむことができるようにするための提言を行いました。

3つのテーマに共通するコンセプトは「垣根を低く」です。日本人と外国人のあいだにある「垣根」、異なる文化や生活習慣のあいだにある「垣根」、そして文化芸術と私たちのあいだにある「垣根」を低くするための提言と言えます。

このような提言に至ったのは、本グループのメンバー自身が、年齢・性別・職業・価値観等の「垣根」を超えて、いずれのテーマについてもフラットな関係性で積極的に議論をしてきた結果と言えます。

地域共生社会という理念を掲げ、その実現を目指す港区において、国際化と文化振興の2つの領域で「垣根」を低くするための私達の提言が積極的に受け止められることを期待します。

提言の体系

テーマ	提言内容（具体的な事業）
国際都市の実現	テーマ性のある交流機会の提供
	外国人が情報を受け取ることができる環境の創出
外国人との相互理解の促進	言葉の壁を低くするための支援
	生活する上でのルールを知るきっかけづくり
文化・芸術に触れる機会の創出	オープンスペースの活用
	風物詩となるイベントの実施
	人気のあるイベントや活動の集中的な実施
	区民の活躍の場と交流機会の充実

第1グループ
【街づくり分野】

第2グループ
【防災・生活安全分野】

第3グループ
【環境・リサイクル分野】

第4グループ
【地域コミュニティ分野】

第5グループ
【国際化・文化分野】

第6グループ
【産業・観光分野】

第7グループ
【子育て・教育分野】

第8グループ
【生涯学習・スポーツ分野】

第9グループ
【福祉・保健分野】

テーマ① 国際都市の実現

計画最終年度末(令和8年度末)における港区の将来像

外国人と日本人の自然な交流を通じて、誰もが安心して暮らせるまち

港区には多くの外国人が住み、働き、そして観光やビジネスに訪れている。多様な人々が同居する地域で気持ちよく暮らしていくためには安心感が不可欠である。そのような安心感は、治安や防災の取組も重要だが、国際都市という観点からは地域における人々との交流によってこそ得られるものと考えられる。言葉や文化が異なっても自然と交流でき、気持ちよく、安心して暮らすことのできる国際都市を目指す。

実現に向けた課題

- 外国人と日本人が交流する機会が十分ではない。
区は交流機会をつくってはいるが、その後も交流が継続し、人間関係がつけられるきっかけにはなっていない。
- 外国人に向けて情報発信を行っているが、十分に伝わっていない。
区では多言語による発信や「やさしい日本語」の活用など、様々な手法を用いて外国人向けに情報発信を行っているが、情報が必要な人がキャッチできていない。

取組の方向性

- 継続的に交流できる機会をつくる。
1回限りのイベントではなく、継続的な交流につながるきっかけとなる事業を実施する。
- 外国人が求めている情報を的確に届ける仕組みをつくる。
外国人が自分のニーズに応じて情報を取捨選択し、必要かつ適切な情報を入手できるよう、アナログも併用した新たな伝え方に取り組む。

具体的な事業

- テーマ性のある交流機会の提供

参加者に共通する趣味や互いに関心ある社会的なテーマ（防災等）を前提とした交流機会をつくる。そして自然にコミュニケーションをとり、継続的な交流へと発展することを目指す。また、子どもがイベントに参加しやすいよう工夫し、子どもの頃から積極的に外国人と交流する姿勢を育む。

- 外国人が情報を受け取ることができる環境の創出

SNS等のオンラインはもとより、大使館や企業、外国人コミュニティ、商店等のつながりを活用し、外国人がダイレクトに情報を受け取ることができる環境をつくる。

参画と協働の推進（区民等の事業への携わり方）

- 様々な国籍の区民や在勤者が、イベント等にボランティアとして参加する。
- 外国人が多く勤める企業等と連携し、情報提供を行うほか、研修機会として外国人にイベント参加を促す。
- 外国人が多く集まる区内の商店・飲食店を經由して外国人に情報提供を行う。
- 日本人の区民が近所に住む外国人に積極的に情報提供を行う。

テーマ② 外国人との相互理解の促進

計画最終年度末(令和8年度末)における港区の将来像

国籍の垣根を低くし、自然な「国際調和」を実現

あらゆる国籍の人々がストレスなく、共に暮らすためには「相互理解」が求められる。受容と理解のバランスが取れている状態が目指すべき姿である。その実現のためには、外国人が日本で生活する上でのルールを受け容れ、日本人は外国人の自国文化を理解することが必要である。このようにお互いが歩み寄ることによって「相互理解」を育み、垣根を低くしながら、ストレスなく共に暮らすことのできるまちを目指す。

実現に向けた課題

- 言葉の壁が存在する。

「相互理解」にはコミュニケーションが必要だが、外国語ができなければならず、また外国語ができたとしても文化が異なるために理解が十分でない場合がある。

- 外国人に生活する上でのルールを伝えることができていない。

区では転入時などに日本の生活ルールを伝える取組はしてきているが、十分に浸透しておらず、外国人が意図せずにルールに反してしまうケースが生じている。

取組の方向性

- 外国人と日本人の双方向から言葉の壁を低くする。

「やさしい日本語」を、お互いが言葉の壁を低くするためのコミュニケーションツールと捉え、外国人も日本人もともに活用するように促す。

- 外国人が生活する上でのルールを知り、理解するための情報提供を工夫する。

説明の工夫によって外国人にとって理解しやすいものにするとともに、伝え方自体を見直し、的確に情報伝達ができるようにする。

具体的な事業

- 言葉の壁を低くするための支援
 - 「やさしい日本語」の活用促進
円滑なコミュニケーションのため、外国人はもとより、日本人の「やさしい日本語」を学ぶ機会を充実させるとともに利用を促す。
 - 言語の習得に対する支援
外国人が日本語を習得する際の支援を行うことで、各人が言葉の壁を低くするための支援を行う。また、外国人と日本人の交流機会のなかでお互いが言葉を学びきっかけをつくる。
- 生活する上でのルールを知るきっかけづくり
ごみの分別や交通ルールなど、暮らす上での最低限のルールを理解してもらうことが必要。分かりやすく、また訴求力のある媒体・コンテンツについて検討し、ルールを自然に受け入れられるようにする。

参画と協働の推進(区民等の事業への携わり方)

- 日本人の区民が外国語や「やさしい日本語」を積極的に習得し、活用する。
- 日本語支援ボランティアの活躍の場を広げる。
- 企業等が企業研修や社内の人脈で、勤務する外国人に生活習慣を教える。
- 日本人の区民が近所に住む外国人に生活習慣を教える。

テーマ③ 文化・芸術に触れる機会の創出

計画最終年度末(令和8年度末)における港区の将来像

日常の中に芸術を

文化芸術は「みる」側も「つくる」側もともに楽しむことができるものである。しかし、関心のない人は触れる機会がほとんどなく、興味を持っている人も様々な事情で触れる機会を得られずにいることがある。そこに存在する垣根を低くし、または越えることで誰もが文化芸術の魅力に気づき、楽しむことができる、住んでいてよかったと思えるまちを目指す。

実現に向けた課題

- 文化芸術に関心がない人が魅力に気づく機会を得られていない。
文化芸術は、関心がない人にとっては垣根が高く、触れる機会がないため、楽しむこともできていない。関心を持ってもらうようにするには時間がかかる。
また、イベント等は多数実施されているが、どれを選んだらよいかも分からない状況がある。
- 関心があっても思うように触れることができない人がいる。
文化芸術に関心があっても、育児や介護、仕事等で鑑賞や創作・表現活動を行う機会を得られない人が少なくない。
- 在住アーティストの活動の場、区民との接点が少ない。
多くのアーティストが在住している港区の強みを生かし切れていない。

取組の方向性

- 日常の中で魅力的な文化芸術に気軽に触れることができるようにする。
人々の生活環境の中のオープンスペースを活用して事業を実施し、日常的に文化芸術に触れることができるようにする。
- 区内で活動をしている区民の存在を生かす。
港区にはプロ、アマチュアを問わず様々な活動をしている区民が多くいることを強みとして生かす。そのような活動をしている区民が活躍することで、文化芸術を身近なものとして感じてもらう。

具体的な事業

- オープンスペースの活用

美術館やホールなどの施設の外や、公共の空間に作品を展示するなど、関心のない人やなかなか触れる機会を得られない人も、生活の中で自然と文化芸術に触れることができるようにする。

- 風物詩となるイベントの実施

定番のイベントを実施して定着させることで、港区の風物詩的イベントとなり、参加しやすさや集客力を高める。

- 人気のあるイベントや活動の集中的な実施

ひとつのイベントとしては敷居が高いジャンルの公演など、入門編としていくつかの分野の公演を一堂に集めて実施する。そして、親子連れや子どもでも気軽に触れられるようにする。

人気の高かった公演や展示等をリバイバル実施する。

- 区民の活躍の場と交流機会の充実

アーティストとして活動する区民に活躍の場を提供することで、区民の鑑賞機会を増やし、かつ活動する区民のステップアップの機会とする。さらに広く区民と交流する機会ともすることで文化芸術を身近に感じるようにする。

近くで鑑賞するだけでなく、一緒に練習する等体験する機会をつくり、「みる」側から「する」側からの楽しさも知ってもらう。

参画と協働の推進(区民等の事業への携わり方)

- 区民目線で、区民が身近に感じる事業について検討・企画する場を設ける。
- 創作・表現活動をする区民が、地域の身近なところで公演等を行う。

開催経過

第5グループ【国際化・文化分野】

回数	開催日時	内容
第1回	令和元年9月20日(金) 18:30~20:30	<ul style="list-style-type: none">・事務局紹介・グループ会議の進め方について・分野における現状と課題について・検討テーマの選定
第2回	令和元年10月9日(水) 18:30~20:30	<ul style="list-style-type: none">・前回の確認・リーダー、サブリーダーの選出・「国際都市の実現」に関する現状と課題について・テーマについての検討
第3回	令和元年10月23日(水) 18:30~20:30	<ul style="list-style-type: none">・前回の確認・テーマ「国際都市の実現」に関する意見交換
第4回	令和元年11月6日(水) 18:30~20:30	<ul style="list-style-type: none">・前回の確認・テーマ「国際都市の実現」について・テーマ「外国人との相互理解の促進」について
第5回	令和元年12月4日(水) 18:30~20:30	<ul style="list-style-type: none">・前回の確認・テーマ「外国人との相互理解の促進」について・テーマ「文化・芸術に触れる機会の創出」について
第6回	令和2年1月15日(水) 18:30~20:30	<ul style="list-style-type: none">・テーマ「文化・芸術に触れる機会の創出」について・テーマ「国際都市の実現」の提言について・テーマ「外国人との相互理解の促進」の提言について
第7回	令和2年1月29日(水) 18:30~20:30	<ul style="list-style-type: none">・前回の確認・テーマ「文化・芸術に触れる機会の創出」について・テーマ「国際都市の実現」の提言について・テーマ「外国人との相互理解の促進」の提言について
第8回	令和2年2月12日(水) 18:30~20:30	<ul style="list-style-type: none">・テーマ「文化・芸術に触れる機会の創出」の提言について・テーマ「国際都市の実現」の提言について・テーマ「外国人との相互理解の促進」の提言について



国際化・文化

みなとタウンフォーラム

第5グループ

メンバー

石川 結万

宇都宮 和美

中村 絵里子

原 鐵二

岩端 由美子

杉浦 亮介

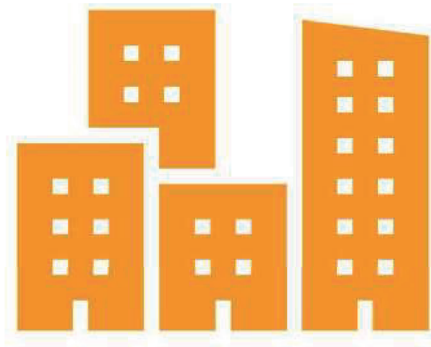
丹伊田 杏花

森 一

テーマ

- 1 国際都市の実現
- 2 外国人との相互理解の促進
- 3 文化・芸術に触れる機会の創出

国際化

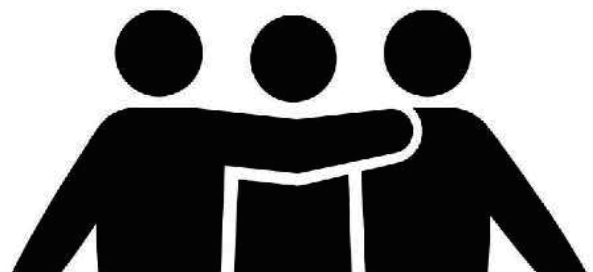


1 国際都市の実現

1 国際都市の実現

将来像

外国人と日本人の
自然な交流を通じて、
誰もが安心して
暮らせるまち



1 国際都市の実現

課題

- 外国人と日本人が交流する機会が十分ではない。
- 外国人に向けて情報発信を行っているが、十分に伝わっていない。

取組の方向性

- 継続的に交流できる機会をつくる。
- 外国人が求めている情報を的確に届ける仕組みをつくる。

具体的な事業

- テーマ性のある交流機会の提供
- 外国人が情報を受け取ることができる環境の創出



2 外国人との相互理解の促進

2 外国人との相互理解の促進

将来像

国籍の垣根を低くし、
自然な「国際調和」を実現



2 外国人との相互理解の促進

課題

- 言葉の壁が存在する。
- 外国人に生活する上でのルールを伝えることができていない。

取組の方向性

- 外国人と日本人の双方向から言葉の壁を低くする。
- 外国人が生活する上でのルールを知り、理解するための情報提供を工夫する。

具体的な事業

- 言葉の壁を低くするための支援
- 生活する上でのルールを知るきっかけづくり

文化



3 文化・芸術に触れる機会の創出

3 文化・芸術に触れる機会の創出

将来像

日常の中に芸術を



3 文化・芸術に触れる機会の創出

課題

- 文化芸術に関心がない人が魅力に気づく機会を得られていない。
- 関心があっても思うように触れることができない人がいる。
- 在住アーティストの活動の場、区民との接点が少ない。

取組の方向性

- 日常の中で魅力的な文化芸術に気軽に触れることができるようにする。
- 区内で活動している区民の存在を生かす。

具体的な事業

- オープンスペースの活用
- 風物詩となるイベントの実施
- 人気のあるイベントや活動の集中的な実施
- 区民の活躍の場と交流機会の充実

Wrap-up

3つのテーマの共通 のコンセプト

「垣根を低く！」

私達【国際化・文化】第5グループの提言は

- 日本人と外国人の間にある「垣根」
- 異なる文化や生活習慣の間にある「垣根」
- 文化・芸術と私達の間にある「垣根」

を低くする事。

地域共生社会という理念を掲げ、その実現を目指す港区において、私達の提言が積極的に受け止められる事期待しています！

みなとタウンフォーラム
国際化・文化グループ（第5グループ）

会議録（第1回）

■開催日時・場所・出席者

日時：令和元年9月20日（金）18時30分～20時30分

会場：港区役所9階 911会議室

メンバー：9名（5名欠席）

事務局：3名（対応部門関係課長1名（国際化・文化芸術担当課長）、企画課担当1名、委託事業者1名）

■次第

（開会）

- 1 事務局紹介
- 2 グループ会議の進め方について
- 3 分野における現状と課題について
- 4 リーダー、サブリーダーの選出
- 5 検討テーマの選定
- 6 その他

（閉会）

■配付資料

資料番号	資料名
1	事務局名簿
2	グループ会議の検討スケジュール
3	提言の構成について
4	グループ会議の進め方について
5	検討希望テーマ集計結果
6	港区の国際化推進の取組について

■会議要旨 (開会)

1 事務局紹介

事務局より、資料1に基づき事務局メンバーの紹介を行った。

2 グループ会議の進め方について

・検討スケジュールについて

事務局より、資料2に基づき、検討スケジュールの説明とグループ会議の日程の確認を行い、水曜日を基本に実施することとした。

・提言の構成について

事務局より、資料3に基づき、提言の構成についての説明を行った。

・会議の手法について

事務局より、資料4に基づき、会議の手法についての説明を行った。テレビ会議による参加者への考慮等の理由から、ホワイトボードを用いた進行となった。

3 分野における現状と課題について

・現行基本計画の検討範囲について

事務局より、港区基本計画のⅡ「にぎわうまち」の政策(16)、Ⅲ「はぐくむまち」の政策(27)の施策①～③が検討範囲であることについて説明した。

(主な意見等)

参加者：国際化は、観光と関連して、歴史文化も関わってくるのではないかな。

事務局：歴史文化は、教育のカテゴリーになる。

参加者：港区基本計画には、活動指標が記載されているが、次期計画における数値の設定についてもこのグループで検討するのか。

事務局：区では3年に1度政策評価を行い、成果目標の達成状況を確認している。来年度、次期基本計画の策定作業を進める中で改めて成果目標を検討する。

参加者：我々は、成果目標については気にしなくてよいということか。

事務局：成果目標は、基本計画策定時に区が設定する。

・「港区の国際化推進の取組について」の説明

事務局(担当課長)より、資料6に基づき「港区の国際化推進の取組について」の説明を行った。

(主な意見等)

参加者：外国人の人口が港区の7.9%を占めるというデータがあったが、大使館や企業関係、飲食店関係など、どれが多いかのデータはあるか。

事務局：大使館員は、日本への住民登録はしていないが、大使館で働いているその他の職員も一定数はいる。在留資格はわかるが、職業までは把握していない。在留資格でみると、永住者が最も多い。

4 リーダー、サブリーダーの選出について

今回は出席者が少ないことから、リーダー及びサブリーダーの選出は次回行うこととした。

5 検討テーマの選定について

事務局より、資料5に基づいて、参加者に事前に依頼した検討テーマの希望調査についての集計結果を説明した上で議論した。

(主な意見等)

事務局：全体会の際に伝えたとおり、国際化と文化の両方を議論していただくように考慮していただきたい。

参加者：順当に、集計結果で多い順に国際化は「2 外国人との相互理解の促進」「3 国際都市の実現」、文化については「4 文化・芸術に触れる機会の創出」をテーマとして設定とするのがよいのではないかと。

(参加者同意)

事務局：では、ボリューム的には国際化についてから検討をお願いしたいが、どのような順で検討していくか。

参加者：テーマ2、3、4は、検討していく中では同じようなことが課題になるようにも思われる。

参加者：テーマ2は、テーマ3のための手段という考え方もできるので、まずは幅広く意見が出せるテーマ3を先に議論してはどうか。

参加者：テーマ2と3は関連性がある。区が行っていることに興味を持ってもらえるようにしたい。

参加者：外国人が日本を理解してもらうことも大切だが、まずは、日本人が外国人のことを理解することも必要だと思う。

参加者：港区に住んでみて、国際化は進んでいるが、課題もあると思った。

参加者：港区にもいろんな面があるので、様々なところに目を向けて検討したい。

参加者：子どもの交流は多いと思うが、大人は機会が少ないように思う。

参加者：無関心層にアピールすることを考える必要がある。

参加者：気さくな交流ができているところもある。

参加者：学校との連携やITの有効な活用なども検討していければと思う。

事務局：国際化については、まず「国際都市の実現」で大使館との関わりなど主体レベルの議論をしてから、より具体的な「外国人との相互理解の促進」について議論していくことについて、次回、議論に入る前に、事務局から皆さんに確認を兼ねて説明する。

6 その他

次回(第2回)グループ会議についての確認

【日程】10月9日(水曜)

【主な内容】・リーダー、サブリーダーの選出
・「国際都市の実現」について議論

(閉会)

以上

みなとタウンフォーラム
国際化・文化グループ（第5グループ）

会議録（第2回）

■開催日時・場所・出席者

日時：令和元年10月9日（水）18時30分～20時30分

会場：港区役所9階 研修室

メンバー：9名（3名欠席）

事務局：4名（対応部門関係課長1名（国際化・文化芸術担当課長）、企画課担当1名、サポートメンバー1名、委託事業者1名）

■次第

（開会）

- 1 前回の確認
- 2 リーダー、サブリーダーの選出
- 3 「国際都市の実現」に関する現状と課題について
- 4 テーマについての検討
 - (1) 意見交換
 - (2) まとめ
- 5 その他

（閉会）

■配付資料

資料番号	資料名
1	「港区国際化推進プラン」概要版
2	検討のプロセス
参考資料	第1回グループ会議 議事録（案）

■会議要旨

(開会)

1 前回の確認

事務局より、前回の検討内容と本日の次第について説明を行った。

2 リーダー、サブリーダーの選出

グループ会議運営にあたってのグループリーダー、サブリーダーがメンバーの互選により選出された。リーダー、サブリーダーより、就任挨拶が行われた。

3 「国際都市の実現」に関する現状と課題について

・現行基本計画の検討範囲について

事務局より、港区基本計画のⅡ「にぎわうまち」の政策(16)、Ⅲ「はぐくむまち」の政策(27)の施策①～③が検討範囲であることについて説明した。

・「港区の国際化推進の取組について」の説明

事務局(担当課長)より、資料1に基づき「国際都市の実現」に関する説明を行った。

(主な意見等)

参加者：やさしい日本語は、どのように活用していくのか。

事務局：行政情報の発信のほか、職員研修も行っている。また、地域の日本人を対象に、やさしい日本語講座を開催しており、実際に外国人と日本人が「やさしい日本語」で交流する取組も行っている。港区に住む外国人の国籍数は非常に多いため、すべての言語に対応することは難しく、「やさしい日本語」を共通言語とすることで、日本人にも取り組みやすくなると考えている。

4 テーマについての検討

事務局より、資料2に基づいて、提言書の構成とそれぞれの項目についての議論の進め方、今回は取組の方向性までを順に議論することを説明した上で議論を行った。

最初は、将来像について意見交換を行い、その後で、課題と取組の方向性に関する意見交換を行った。

(将来像に関する主な意見等)

参加者：アンケート結果をみると、外国人で行政サービスには9割以上が満足しているが、地域活動へ参加している割合は少ない。外国人にとって、港区は住みやすいが、活動に積極的に関わっていないということがいえる。

参加者：受け入れる側の日本人の「国際化」も必要だと思う。

参加者：どちらかがどちらかを歓待するのではない交流が必要。

参加者：言葉の壁は大きいと思う。日本人も、外国人とのコミュニケーションのため、カタコトでもよいので、英語を学んだ方がよいかもしれない。

参加者：港区のやさしい日本語の取組について、外国人が使って必死に伝えようとする姿勢はすばらしいと思う。日本で暮らしてコミュニケーションが取れるようになった外国人は、

自国に帰っても、日本の良いところを広めてくれる。やさしい日本語を使うことで、外国人という意識がなくなることは良いことと思う。

参加者：この分野は、基本計画では「にぎわうまち」に位置付けられているが、やさしい日本語の取組は、「にぎわうまち」の実現にどのようにつながるか。

参加者：そのことについては、ITや先端技術の導入が考えられる。港区は先進的な企業も多いので、それを生かしたことができるとよい。

参加者：歌や踊りから交流できると面白い。地域の盆踊りでも外国人も一緒に入ってきている。増上寺では国際的なイベントも多く開催されており、異なる文化と場の融合が地域で起きている。

参加者：音楽の力で、様々な交流を生み出せるとよい。つながるための媒体を増やしていくことが大切である。

参加者：日本人が外国人をもてなす意識ではなく、両方が参加することが楽しいことが大切。

参加者：お寺を使ったイベントが増えている。アーティストがその場所を使って、いろいろな歌を歌っている。

参加者：区内で、たくさんの良いイベントがあるが、外国人にあまり知られていないことも多い。

参加者：港区には多彩な人材がいる。その人間力を生かすことが大切。大人は構えてしまっているが、子ども達は、自然に交流できていると思う。

参加者：将来の国際人を育てるための教育、人づくりが重要と思う。

参加者：子どもは、海外で生活すると、すぐになじむことができる。

参加者：子どもが参加できるイベントをもっと増やすとよい。

参加者：将来像としては、住んでいる人が誇りに思うまちになるとよいと思う。日本人も外国人も、お互いと意識しないようになれるとよい。

参加者：外国人と日本人の壁をなくし、防災など様々な取組を一緒にやること。

参加者：垣根のない状態になること。長期的な視点では、子どもの教育からはじめることが重要。

参加者：にぎわうという視点では、港区はビジネスのハブになるとよい。今はプロジェクトベースで人が集まってくる時代になっている。そのステージになること。目的のために集まった人が仕事をしていく場や機会を提供すること。

参加者：経済的な視点も重要である。

参加者：港区のあの場所で、あのプロダクトが生まれた、というようなイノベーションを生み出すまちになることが期待される。

参加者：個性が輝いて、みんながシェアできる、まちになること。

参加者：それぞれのルーツなどを個性として捉えること。

参加者：港区は意外と広く、いろいろな場所があるが、みんなが同じ意識を持って、高きを目指すようになること。特に若い人の意識が大切。若い世代は余裕がなくなりがちだが、若い人の意識を変えていきたい。

参加者：赤坂は、古いところと新しいところがミックスしたまちで、それが面白さにつながる。赤坂サカスの近くに勝海舟が住んでいたところがあったりする。ラグビーの日本代表は良い例で、外国人が日本に来て活躍しているし、日本人も、外国人と一緒にやることで、力をつけるようになっている。

参加者：中世のフィレンツェが文化的に栄えたのは、メディチ家があり、産業があり経済的な支

えがあったからである。

参加者：若い芸術家も、区でバックアップしてもらえるとよい。

(課題及び取組の方向性についての主な意見等)

参加者：インセンティブの仕組みがないと、参加を増やすのは難しい。企業活動の方が、オープンになりやすい。

参加者：地域においては、外国人を嫌がるようなこともあるか。

参加者：麻布十番の祭りでは、大使館が出展する海外ブースが、なくなってしまった。

参加者：その祭りは、芸能人が来るような、かなり大々的なものになってしまったので、その影響もあるかもしれない。

参加者：交流の場を増やすこと、集う場を作ること。外国人に区が行っていることを知らせる取組が必要と思う。

参加者：港区の取組を、もっと外国人に知ってもらえる仕掛けができるとよい。流山市のように、マーケティングに力を入れることで、行政よりも民の力を活用することができると効果的である。区が主催して、グローバルピッチコンテストができるとよい。日本の自治体が主催というのはあまりないと思うが、港区でできると面白い。

5 その他

次回（第3回）グループ会議についての確認

【日程】10月23日（水曜）

【主な内容】・「国際都市の実現」について、取組の方向性、
具体的な事業、参画と協働の推進について議論

(閉会)

以上

みなとタウンフォーラム
国際化・文化グループ（第5グループ）

会議録（第3回）

■開催日時・場所・出席者

日時：令和元年10月23日（水）18時30分～20時30分

会場：港区役所3階 産業・地域振興支援部 会議室

メンバー：4名（5名欠席）

事務局：4名（対応部門関係課長1名（国際化・文化芸術担当課長）、企画課担当1名、サポートメンバー1名、委託事業者1名）

■次第

（開会）

- 1 前回の確認
- 2 テーマ「国際都市の実現」に関する意見交換
 - （1）将来像について
 - （2）課題について
 - （3）取組の方向性について
 - （4）具体的な事業について
 - （5）参画と協働について
- 3 まとめ
- 4 その他

（閉会）

■配付資料

資料番号	資料名
1	第2回グループ会議 意見の概要
2	検討のプロセス
参考資料	第2回グループ会議 議事録（案）

■会議要旨

(開会)

1 前回の確認

事務局より、前回の検討内容と本日の次第について説明を行った。

2 「国際都市の実現」に関する意見交換

事務局より、資料1に基づいて、前回の意見概要について説明を行った。資料2に基づいて、提言書の構成とそれぞれの項目について確認を行い、今回は、将来像をかためた上で、参画と協働までを順に議論することを説明した上で議論を行った。

(1) 将来像について

事務局：今回は、将来像を明確に共有できないまま議論を進めてしまったので、今一度、皆さんで共通認識を持っていただいたうえで、前回出た意見を基に議論をお願いしたい。

参加者：「国際都市の実現」と、「外国人との相互理解の促進」の違いについて、「国際都市の実現」の方がより広い概念と認識しているが、どのように分けて考えればよいか。

事務局：皆さんなりの「国際都市」とはどういうものかということ共有していただき、「相互理解」は次に取り出して議論することとして、進めていただければと考えている。

リーダー：将来像をまず設定してから課題などの議論を進めていくこととして、令和8年にどのような姿になっているかを考えるということになるか。

参加者：国際都市として何を指すかということで考えると「垣根がない」ということかもしれないが、港区にいる外国人が気持ちよく過ごせることではないかと考える。

リーダー：海外での経験がある方はその経験も踏まえての意見を出してもらいたい。

私も、外国人が様々なイベントに参加する際に不便を感じることなく参加できることではないかと思う。防災訓練や、スポーツが好きな外国人も多いので大会などにも自然に参加できるとよい。

参加者：お互いがストレスを感じない共生が大切。そのためには、外国人に日本のルールを理解してもらう必要もある。日本のルールを理解して馴染んでもらうことで、お互いにストレスをなくすることができるのでは。

参加者：世界的に人が集まるということと言うと、ニューヨークは、特に「おもてなし」というようなところではないが、たくさんの方が集まっていて、何が魅力なのだろうかとも思う。

日本人は、外国人に対して身構えてしまう傾向がある。日本のことを好きだと言ってくれる外国人は多いが、英語が通じないことが多いので、個人では動きにくいと言われたことがある。

先日の台風では、交通機関の運休情報が分からずに動けなくて困った外国人もいたとも聞いている。

外国人を受け入れる意識を醸成するため、ホームステイを推進する取組などできるとよい。外国語ができなくても受け入れは可能だと呼びかけることも必要。

参加者：日本人は、語学が不得意な傾向にあるように思う。

参加者：今の子ども達は、小学校でも英語の授業があったりするので、自分たちよりも自然に外

国人と接することができるようになるのではないか。

港区での将来像は「外国人が住みやすいような環境を整え、増やしていく」ということではないように思う。

参加者：共生する上で、お互いがストレスフリーであることが大切。

参加者：英語を話せないことではなく、話すことができないから身構えてしまうことが問題。

参加者：日本は災害が多いので、安全・安心は必要とされていることであり、受け入れ側としても取り組む必要がある。

「外国人が自然に交流できるまち」という意見をもらっている。

「自然に」というのはストレスフリーと言える。

前回の意見も踏まえると、「壁や垣根のない」という意見も出ている。

参加者：ビジネスの話も出ていたがよいのか。

事務局：手段としてのビジネスというはあるが、ビジネスを軸にすると、「国際化」ではなく「産業」の分野の話になる。

リーダー：これまでの意見を踏まえ、ここでの将来像は「外国人と日本人が、自然に交流できる垣根のない、安全安心なまち」でいかがか。

(一同了承)

(2) 現状と課題について

リーダー：将来像と現状のギャップや、現状をもっとよくするにはどうするかということだが、自然に、ストレスフリーで交流できているか、ルールという視点ではどうか。

参加者：ルールについては、最近の事例では、ラグビーワールドカップの試合の後で外国人が集まって騒いだり、ゴミを捨てたりということがあがあるが、「騒がないで」という表記が日本語だけでわからなかったりする。警察の呼びかけも「帰ってください」の一言を英語で言うことができればスムーズに伝わるのでは。守ってもらいたいことは外国語で伝えの方が良い。

参加者：日本のルールという点では、自国ではそれが当たり前であっても、日本では駄目であることを伝える必要もある。

リーダー：外国語の表示が不足しているということか。

参加者：今は英語だけでなく中国語やハングルの表記も増えてきているが、それでも日本のルールが守られていないことを考えると、定着するのにも時間がかかるように思う。文化や習慣の違いがあることについても認識する必要がある。

参加者：文化や習慣の違いが「垣根」のひとつになっていることは課題と捉えることができる。

参加者：前回の意見で「イベントの情報が把握できていない」とあったが、きちんと情報が伝わるようにすることも考える必要がある。

リーダー：他には安全安心に関してはどうか。

参加者：できるのは、安全安心に関わる情報は、的確に伝えるといったことでは。

参加者：外国人が安全安心だと思うにはどうしたらよいか。

地震がない地域の出身者は特に地震が苦手のようなのである。防災訓練には積極的に参加したいというニーズはある。

事務局：区では地域防災訓練や、外国人を対象とした防災フェスタ等を実施しているが、外国人

の参加が少ないことは課題のひとつと捉えている。

参加者：防災に関することなどは、関心がある人だけでなく、すべての人に知ってもらいたいことである。

リーダー：他には、前回日本人の国際化も必要という意見があったが。

参加者：区では、外国人と日本人の両方に対してイベントの案内はしているのか。

事務局：先ほどの防災フェスタやその他のイベントについても、なるべく多言語で案内をするように努力はしているが、外国人の参加は少ないのが現状。

参加者：大使館や、外国人の集まり等を活用することはできないか。

事務局：大使館やインターナショナルスクールなど様々な団体への情報提供は行っている。団体が実施する防災イベント等に呼ばれて情報提供することもある。

リーダー：大学では何か交流の機会はあるのか。

参加者：学校や学科によって異なるが、自分の学科は、交流の機会が多い方だと思う。

参加者：企業に勤めている外国人には、社内で、例えば防災について等周知の機会はあるのか。

参加者：大企業では組織的に行っているかもしれないが、規模が小さいところは難しいと思う。

参加者：勤めている本人だけではなく、日本語がわからないことが多い家族へのフォローも必要である。

参加者：在外日本企業の場合は、商工会議所が現地で取りまとめを行っている。

参加者：大使館が行っている交流イベントはあるか。

参加者：イベントは実施されているようだが、積極的に広報されていないように思う。

参加者：災害時に、区から大使館へ防災情報を提供しているか。

事務局：災害時の情報は、東京都から大使館へ情報伝達することになっている。

(3) 取組の方向性について

リーダー：安全安心という視点から情報伝達の手段に関して、前回出ていた交流の機会を増やすということがあげられる。

(4) 具体的な事業について

リーダー：事業というと大げさな感じがするので、取組という視点で。

まずは「交流の機会を増やす」ことについて前回の意見から確認をしていく。

ホームステイの機会の充実ということがあった。

事務局：皆さんが行政によるバックアップ体制の充実ということを考えているのであれば、具体化するに当たっては、どこを区が後押しすれば、ホームステイの機会が充実するかというように考えていただければと思う。

リーダー：参加したくなるイベントの開催ということでは、前回いくつか意見が出ていた。

参加者：港区には東京タワーという、外国人にも知名度が高いスポットがある。昼夜問わず、イベントの集客力がある。

参加者：外国人が興味を持ってきてくれるような、お寺や東京タワーなどの場所を選んで交流を図るとよいのだろうか。

日本人側からの発信だけでなく、外国の方々が自国のことを紹介するようなイベントの開催もできるのでは。例えば大使館等はよい機会と捉えてくれないか。

- 参加者：知らない国はたくさんあるので、そういった国を知る良い機会になる。
- 事務局：自国の文化紹介は大使館の重要な業務のひとつであり、区は区有施設の利用や広報等の面で協力をしている。区が協力する大使館イベントは年間10～20件開催されている。
- 参加者：そういったイベントには日本人も外国人も積極的な参加があるのか。
- 事務局：主に日本人向けのものが多いが、自国の方など外国人の方が来ることもある。
- 参加者：毎年3月の東京タワーの下で開催されているワールドフェスティバルはどこが実施しているのか。
- 事務局：区の観光政策担当が実施しているが、大使館とのタイアップ事業で、1月から3月ごろにかけて、大使館等を訪問できるスタンプラリーも実施している。
- 参加者：そのようなイベントの情報はどのように発信されているか。
- 事務局：広報みなとや区のホームページ、区有施設へのポスター掲出等。
- 参加者：インスタグラムでの発信はしていないのか。
- 事務局：現段階では区はインスタグラムを使っていない。その他のSNSは、イベント周知等にはあまり活用できていない。
- 参加者：SNSを活用すれば、外国人に限らず日本の若者にも情報が伝わるのではないか。
- 事務局：外国人向けにやさしい日本語と英語併記のフェイスブックは運用しており、イベント情報も随時発信しているが、登録者数は最近増えていない状況である。
- 参加者：メールマガジンの配信は行っているか。
- 事務局：やさしい日本語、英語、中国語、ハンガルの言語別に配信している。
- 参加者：これからは紙媒体よりもSNSの活用が有効ではないか。
- 参加者：インスタグラムを活用するのであれば、日本人向けと外国人向けを分けずに、日本語と外国語を併記すれば、「分ける」という意識がなくなるのでは。
また、インスタグラムならではの「映え」る画像として、東京タワーなどを上手く活用して港区をアピールできるのでは。
- 参加者：フェイスブックによる情報発信は、浸透してきたのでは。外国人の登録状況はどのような状況か。
- 事務局：フェイスブックは登録者の属性はわからないが、メールマガジンは英語の登録者が一番多い。
- 参加者：ホームステイについて、区が関わる場合、どのような取組が考えられるか。
- 事務局：区が直接実施する方法もあるが、地域行政のあり方としては、やろうとしている方々を支援するという形が望ましいように思う。
体験談の共有等による気運醸成であれば、区も取り組みやすい。
- 参加者：どのような団体が行っているか。
- 参加者：ロータリークラブでは、交換でホームステイの仲介をやっている。会員の家庭を紹介して受け入れをしている。相手が分かるから安心してできるというものもある。
- 参加者：インターナショナルスクールと、日本の学校の交流の機会はあるか。
- 事務局：学校同士の交流はわからないが、区立小中学校では外国人の子どもが集まっている国際学級がある。
- 参加者：何らかの交流をサポートできるとよい。
- リーダー：外国語での案内ができていない、伝えられていないということについては、いかがか。

表示があるだけではなかなか伝わらないのか。

事務局：行政情報に関しては外国語で案内しているが、日本で常識とされているようなこと的生活習慣までは、区で網羅しきれていない。

参加者：外国人のペットのマナーについては、感心するものがある。

ゴミ出しなどのルールをきちんと守っている外国人は、どこでルールを知るのだろうか。

参加者：地域コミュニティではないか。

参加者：代表的なものに町会・自治会があるが、日本人も入らない傾向にある。外国人に入ってもらっても難しいかもしれないが、そういったところで交流ができるとよい。

参加者：公園等を活用して、日本人も外国人もみんなで気楽に集まることができるイベントが定期的にあると、自然に人が集まるようになるのでは。

リーダー：区民まつりなど、既に実施している良い取組をさらに充実させるようなことも考えられる。そういったイベントにもっと外国人が参加できるようになるとよい。

リーダー：安全・安心に関する取組は防災の分野になるか。

事務局：安心という観点では、外国人向けの相談事業なども行っている。

参加者：相談事業や情報提供について、もっと知ってもらえるようにすることができるとよい。

事務局：区としては、チラシや広報紙、SNSなど様々な方法で周知し、外国人の転入手続の際には外国人向けの発行物をまとめたパッケージを必ず渡しているが、全てに目を通してもらうのは難しい。

リーダー：その部分について、我々が取り組めることがないか。今の港区の取組を最大限に生かすために、区民ができることは何か、という視点で、次の参画と協働というところに繋がられないか。

(5) 参画と協働について

リーダー：区民サイドで取り組めることと行政に手助けしてもらうこと。

事務局：区では、やさしい日本語をきっかけとした外国人の参画と協働に力を入れている。

日本人もアプローチしやすく、また、「日本語」は日本で暮らす外国人は必ず直面する問題である。日本人と日本語を学んでいる外国人との交流機会を設け、その中で日本人が地域のイベント等に外国人を連れて行ってもらえるような流れができるとよい。

参加者：日本にいる外国人は何が一番困っているのか。赤ちゃんを連れての方は特に大丈夫なのかと思う。

参加者：相談があれば対応できると思うが、通常の情報発信だけになるか。

事務局：住民登録をされていれば、子どもの定期検診の案内等は日本人と同様に届くようになっているが、一般的な情報については通常の情報発信によることになる。

3 まとめ

今回の議論内容について確認し、次回は、参画と協働の推進から検討した後にテーマの全体のまとめを行うこと、次のテーマである「外国人との相互理解の促進」について検討に入ることを確認した。

4 その他

次回（第4回）グループ会議についての確認

【日程】11月6日（水曜）

【会場】港区役所3階 産業・地域振興支援部 会議室

【主な内容】

- ・「国際都市の実現」について、参画と協働の推進についての議論の続き
- ・「外国人との相互理解の促進」について、将来像、現状と課題、取組の方向性について検討

（閉会）

リーダーが第3回グループ会議の閉会を告げ、終了。

以上

みなとタウンフォーラム
国際化・文化グループ（第5グループ）

会議録（第4回）

■開催日時・場所・出席者

日時：令和元年11月6日（水）18時30分～

会場：港区役所3階 産業・地域振興支援部 会議室

メンバー：6名（3名欠席）

事務局：4名（対応部門関係課長1名（国際化・文化芸術担当課長）、企画課担当1名、サポートメンバー1名、委託事業者1名）

■次第

（開会）

1 前回の確認

2 テーマ「国際都市の実現」について

（1）意見交換

①具体的な事業について

②参画と協働について

（2）まとめ

3 テーマ「外国人との相互理解の促進」について

（1）意見交換

①将来像について

②現状と課題について

③取組の方向性について

（2）まとめ

4 その他

（閉会）

■配付資料

資料番号	資料名
1	第3回グループ会議 意見の概要
2	検討のプロセス
参考資料	第3回グループ会議 議事録（案）

■貸与資料

資料番号	資料名
1	港区基本計画

■会議要旨 (開会)

1 前回の確認

事務局より、前回の検討内容について説明を行った。

2 「国際都市の実現」について

事務局より、資料1に基づいて、前回の意見概要について説明を行った。

(1) 意見交換

①具体的な事業について

サブリーダー：具体的な取組について追加するべき内容があれば出してほしい。ラグビーのワールドカップのような、国際的なスポーツイベントを機にした、垣根を超えて皆が一体化できる取組があると良いと思う。

②参画と協働について

事務局：皆さんが国際都市の実現に向けて何ができるのか、自分がどういうことができるのかを考えていただき、それを区民一般に広げられるかという議論をしていただきたい。

参加者：区立小学校の連合運動会にインターナショナルスクールも呼ぶなどすると、外国人と交流の場になるのではないかな。

参加者：インターナショナルスクールと日本人学校のクラスとで、合同授業をやるのも良い。

参加者：交流するためには、運動会や音楽などの、テーマが必要だと思う。

参加者：区の仲介でないと難しいように思う。

事務局：学校教育では「社会に開かれた教育課程」という言葉でもって、地域に出て学ぶということが推奨されているので、外国人の方にも関わってもらえるとよい。

参加者：イベントや交流の機会は区じゃないと大きいものは作れない。区民がイベントに携わるとしたら、ボランティアとして運営に関わるか、出演者として参加するかだと思う。

事務局：港区は人口に占める外国人の割合は多く、また国籍も多様なので、区民が参画すれば必然的に国際色豊かになると思う。

参加者：スピーチコンテスト等をオープンイノベーション風にやることはあり得ると思う。区主催で、ビジネス面での交流ができるとよい。ビジネス甲子園みたいなものがあると港区に来やすくなると思うが、今回は来てもらうよりも気持ちよく過ごすということを論点としているので別の内容を考えたいと思う。

事務局：このテーマでは、外国人在住者と日本人在住者との交流の話をしてきたと認識している。そのなかで自然な交流、垣根のなさなど、日常的な交流機会をつくっていこうという意見が出てきたのだと思う。そのための要素は実は企業にもあるかもしれないがいかがか。

参加者：企業をうまく引き込むことが重要だと思う。

事務局：区内企業が、国際交流の機会に関わるインセンティブはあるのか。

参加者：マーケティングリサーチになるし、社会貢献活動にもなると思う。また、どの会社もグローバル化が課題となっているので、国際交流に関わることは企業側にもメリットがあるように思う。そういった機会に関わることはある種の研修となり得る。外国人と交わ

りながら、言葉の壁を感じたり、コミュニケーションを学んだりする。こういう取組をパッケージとして提供できると、港区のブランド価値にもなるのではないか。

事務局：企業の冠事業になる可能性もある。

参加者：港区には、そのような資源があることが強みである。

事務局：情報発信の充実についてはいかがか。

外国人の方から情報発信について直接要望をいただく機会はあまりない。情報を発信していること自体が知られていないのかもしれない。情報に接する機会をどのようにつくるのが課題である。

参加者：外国人に限ったことではないが、行政の事業に興味がない人が多いように思う。外国人は大使館とつながりがあると思うので、大使館を通じて情報発信してはどうか。

参加者：港区は積極的に情報発信をしていると思うし、情報が多すぎて選択することが難しいほどである。ただ、外国人の方をターゲットとしているものが少ないと思う。

参加者：交流の機会について周知していかないといけないか。

参加者：目的のないまま交流するのかという疑問がある。

参加者：外国人の方が勉強などを目的として参加する事業があり、そのような事業に日本人が交流を意識して参加する方が自然か。

参加者：情報発信は、国際都市の実現だけでなく、どの取組でも課題になると思う。港区は様々な取組をしているが、それが伝わるような仕組みが必要である。さらに外国人が自分の興味に基づいて取捨選択できるぐらいに情報が流通するとよい。

参加者：キラーコンテンツがあると効果的だと思う。それがあれば、情報はSNS上で自然と拡散する。

参加者：前回のグループ会議では交流機会を増やそうという話になった。そのような機会がないと日本のルールも理解できないと考えると、機会提供とその情報伝達は重要である。

事務局：法人や大学等の参画でもよいと思うが、いかがか。

参加者：いずれにせよ交流すること自体が目的では、長続きしないのではないか。

参加者：町会・自治会はいかがか。

事務局：活動は区としてもバックアップしているが、日本人の住民も活動の参加率が高くはない。

参加者：そもそもイベント等の情報はどのように発信しているのか。

参加者：区民センター等でチラシを見ることが多い。

事務局：区の施設での周知が中心であり、事業に参加するために施設に行く人は多くの情報に触れることができるが、参加したいと思いながらもアクセスできていない人や、区の施設に行かない人は日本人でも情報に触れる機会が少ない。外国人はなおのことではないか。

参加者：きっかけとして何らかの目的がないと始まらないということか。

参加者：大学には外国人は多い。大学内で外国人が参加するイベントは学内の掲示板にたくさん貼ってあり、主にそこで情報を得ている。

他には、外国人が多く訪れるカフェには外国人向けのチラシが置いてあり、実際に効果があるように思える。そういったところで区の情報を提供すると、外国人の目にも留まるのではないか。

参加者：大使館よりも、外国人が多く訪れるカフェやレストランの方が効果的だと思う。

事務局：インターネットの活用とはよく言うが、情報が届いているかの検証は難しいが、外国人

が集まる場所にチラシを置くと、その方が情報は直接届きやすいかもしれない。

参加者：一人が気に入ると仲間を連れてきて、どんどん広がる。

リーダー：目的をベースにインセンティブをつくるパターンと、偶発的に情報に出会うように仕掛けるパターンがあると理解した。交流の場は広い方がよいのか、それとも小規模な方がよいのか。交流の場に参加するために必要なものは何だと思うか。

参加者：楽しいと思うことがあれば行く。

参加者：交流を楽しむのがテーマというのは難しい。

事務局：今、具体的な取組として挙げているものは、いずれも交流が目的となっている事業である。交流が目的となっているのか、何か別の目的で集まった結果として交流が生じているのかという違いがあるように思う。

参加者：将来像においては、自然と交流できることが望ましいということになる。

参加者：自然な交流のためには、やはり何らかのテーマが必要なのではないか。

参加者：先ほど大使館が情報発信をするという話があったが、日本人が大使館を訪れることは気後れするが、ワインパーティやクリスマスの催しがあるというのと、たしかにアクセスしやすい。

(2) まとめ

リーダー：情報発信について意見を出し合ったが、アナログな情報発信について多く意見が出たことは意外だが、そういった取組が大事なのだろうと思った。区と一緒に外国人と接する機会をつくっていくのが必要なのだろう。

3 「外国人との相互理解の促進」について

(1) 意見交換

① 将来像について

参加者：一番の課題は言語の壁だろう。

参加者：港区では優しい日本語の取組を行っている。相互理解のための取組だと思う。

事務局：このテーマを選んだ意図をふり返ることも有効かもしれない。

参加者：先ほどのテーマの国際都市を実現しようとするれば、相互理解が不可欠であるということだと認識している。理想は、日本人と外国人の垣根がなくなることだと思う。ただ、それが容易ではないので、だからこそ難しいテーマだと思う。

参加者：日本人同士でも完全に相互理解はできていないと言える。相互理解とは相手を尊重するという事ではないか。

参加者：お互いの文化の違いに驚かなくなるということではないか。

参加者：お互いの生活様式の違いに驚いても、それを否定することなく受け入れることだと思う。

事務局：言葉の壁が問題という意見があったが、生活様式や相手の文化に対する理解には言葉は必要ないこともある。相互理解の理想像の設定次第で、言葉の壁は課題にならない可能性もある。

リーダー：もっと海外の文化や外国人のことを知ろうということではいいか。

参加者：日本人でも日本人のことを知らない。どこまでやるのか一定の目安が必要。

事務局：何かを知るといっても、知る構えをつくるという意見が提起されたと思う。ユニーク

な視点だと思う。

参加者：外国人も溶け込もうとしている人がいる。その場合、受入側の日本人の方にも問題があるのかもしれない。

参加者：何か好きなものを介すると外国人とも交流しやすいと思う。

参加者：お互いがストレスなく過ごすことが相互理解だとするならば、どうなればストレスがなくなるのか。外国人にとってのストレスとは何か。また日本人にとってのストレスとは何か。

参加者：日本人にとってのストレスは生活様式におけるギャップだろう。

参加者：ストレスがなくなることはない。ただ、日本人がどういった考え方を持っているのか、また外国人がどのように考えているのかということを知っておくということは、理解につながるのだと思う。そうすると、交流機会を増やして、お互いのことを知ろうという話となるのだろう。

参加者：日本人にとってのストレスは、外国人の一部が日本のルールを守らないということがあがるが、ルールを知らないことが根底にある。それを踏まえると、日本のルールや文化を理解し、日本人と同じように暮らしてくれるようになることが相互理解にとっては大事なのではないか。

参加者：たとえば外国人のタトゥーをどのように捉えるべきか。日本の入れ墨の概念では公衆浴場を利用できないが、海外にはタトゥーをお洒落として入れる文化がある。

参加者：タトゥーは日本ではよくないものとしてみなされてしまう。

参加者：ただ、海外のタトゥーは、日本の入れ墨とは異なるものではないか。

参加者：その違いを理解できるかということが問題なのだと思う。

参加者：こちらが許容するか、こちらを守るかという話なのだと思う。

事務局：日本人が海外に行ったときも感じることはあるのではないか。こちらの常識があちらでは非常識であることなど。

参加者：その国のマナーやルールを知らされていないのだと思う。日本人が許容できる範囲の目安に、お互いが従って生活できるとよいのでは。現状はまだ構成されていないのではないか。

リーダー：何でも理解するだけでなく、こういうことだと教える必要もあるということか。

参加者：そうすると閉鎖的・排他的だということにもなりかねない。

参加者：いや、それも相互理解なのだと思う。日本ではこういうことは駄目だというルールを理解してもらえるようにできるといい。

事務局：物事によって受け入れることと、合わせてもらうことが異なってくるという理解でよいのか。

リーダー：そろそろ終了時刻なのでまとめていけるとよいが、みなさんの意見を引き出しおきたい。

参加者：話を聞いていると文化の面とマナーの面があると思う。文化については否定するのではなく、お互いに受け入れることが望ましいのだろう。一方、マナーについては、日本で生活する上では日本のマナーを理解し、過ごしてもらうのが相互理解ではないかと思った。

参加者：日本が好きで来てくれる外国人を優しく受け入れてあげると同時に、日本の文化も伝え

るべき。強制的にしない方が日本人にはあっていると思うが、それだけに難しい。

参加者：外国人との相互理解の促進からすると、結局できることは交流機会を増やし、相手のことを互いに知る機会を増やすことしかなくなる。これを1つのテーマに持ってくることに無理がある気がする。

参加者：自分にとって相互理解は、マナーも含めて受容できるような広さを持つのかと思って考えていた。ただ、意見を聞いていると、許容範囲の中でこちら側のことをどのように理解してもらうのか、伝えていくのかということを考えていく必要があるのだろう。最初は、受容するために日本人がどう変わるのかと考えていたが、それとは違うのかもしれない。

参加者：相互理解は自然に交流するという意味だと思う。ただ、細かいことが気になってくるので、ルールを決める必要はあると思う。垣根をつくるというよりも、秩序をつくるということだろう。それがあればこそ、自然に交流できるのだと思う。

(2) まとめ

リーダー：自分にとっても今日の議論は意外だった。積極的に受容するべきという意見になるかと思ったが、受け入れつつ理解もしてもらうべきだという話になったのは、自分にとっても勉強になった。答えのないことだが、参加している皆さんの言葉でまとめたいと思うので、次回も積極的に意見交換ができるとよい。みなさんの思いを具体的な提言として区に伝え、何らかのアクションにつなげたいと思うので、ぜひお願いしたい。

事務局：将来像の話が中心となったが、既に課題に位置づけるべき内容にも触れていただいた。それらは現状と課題に関する意見として事務局で整理しておくので、次回はそれを参考に意見交換をしていただきたい。

4 その他

次回（第5回）グループ会議についての確認

【日程】11月20日（水曜）19：00～

【会場】港区役所9階 911会議室

(閉会)

リーダーが第4回グループ会議の閉会を告げ、終了。

以上

みなとタウンフォーラム
国際化・文化グループ（第5グループ）

会議録（第5回）

■開催日時・場所・出席者

日時：令和元年12月4日（水）18時30分～

会場：港区役所5階 512会議室

メンバー：6名（3名欠席）

事務局：4名（対応部門関係課長1名（国際化・文化芸術担当課長）、企画課担当1名、サポートメンバー1名、委託事業者1名）

■次第

（開会）

1 前回の確認

（1）テーマ①「国際都市の実現」について

（2）テーマ②「外国人との相互理解の促進」（将来像）について

2 テーマ「外国人との相互理解の促進」について

（1）意見交換

①課題について

②取組の方向性について

③具体的な事業について

④参画と協働について

（2）まとめ

3 テーマ「文化・芸術に触れる機会の創出」について

4 その他

（閉会）

■配付資料

資料番号	資料名
1	テーマ①まとめ
2	テーマ②まとめ
3	検討のプロセス
4	テーマ②に関する事前意見まとめ
参考資料	第3回グループ会議 議事録（案）
参考資料	グループ会議の検討スケジュール(案)

■貸与資料

資料番号	資料名
1	港区基本計画

■会議要旨 (開会)

1 前回の確認

事務局より、前回の検討内容について説明を行った。

参加者：テーマ①と②に重複があるように思う。国際都市の実現のためにどういったことが必要かと考えると相互理解が必要だということになり、議論する上で区分けが難しい。

事務局：重複している部分はあると思うが、テーマ②についてもひと通り意見を出した上で、テーマ①と②に振り分けて整理していくのはどうか。

参加者：これまでの意見交換は外国人住民をイメージしていたが、外国人旅行者も多い。念頭に置いておいた方がよいだろう。外国人旅行者が日本に不満を思うことのひとつに、飲食店が閉まるのが早いということがある。ナイトタイムの充実は国際都市の重要な要件のひとつかもしれない。

参加者：にぎわうまちを考える上ではコアが必要だ。例えば、近隣の渋谷区とどのように差別化するのか。また、先ほど提起されたテーマ①と②の違いについては、自分も分からなくなってきた。

事務局：テーマ①と②をどのように違うものにするのかという点は、テーマ②の意見出しが終わった段階でいいのではないかと。両方が同じレベルまで話し合えた段階で双方を比較し、最終的な提言文において差別化できればよいと思う。

2 テーマ「外国人との相互理解の促進」について

事務局より、資料2と資料4に基づいて、説明を行った。

※今回は、前回予定されていた日程での開催ができなかったため、予め意見の提出を受け、資料4としてまとめたものを配付して議論を行った。

参加者：テーマ①で話し合った「外国人と日本人が自然に交流できる、垣根のない、安心・安全な状態」が相互理解をしている状態という感じか。たとえばテーマ①はハードに関する提言、テーマ②はソフトに関する提言というように考えられるだろうか。

事務局：テーマ①の「垣根のない状態」について話し合われていたことが、テーマ②でも見られる。

参加者：前回の議論では、「垣根のない状態」といっても最低限のルールがあるということが確認されたと思う。垣根のレベル感について議論してはどうか。

参加者：垣根が「ない」のではなく「低い」のではないかと。垣根が完全になくなることはない。

リーダー：将来像では「垣根が低い」ということを表現できるとよい。

参加者：低いものであれ垣根をなくせない部分を絞り込めるとよいのではないかと。何か特定のことに限っては垣根を低くするという書き方をしても良いと思う。

リーダー：「垣根が低い」という将来像と仮置きして、課題について考えていきたい。会議前にいただいた意見の中で課題として言語の壁が挙げられているが、いかがか。

参加者：言葉の壁への対応として「やさしい日本語」が挙げられているが、外国人と日本人がそれぞれの言葉を学び合うことが取り組むべきことではないかと。それを区が支援する方が

つながると思う。

参加者：自分は「やさしい日本語」が使われるようになると、よりギャップが生まれるように感じる。相互理解を育むためには文化の本質をそれぞれ理解する必要があると思うが、「やさしい日本語」では本質を表現するのは難しいのでは。

参加者：外国人にとっては「やさしい日本語」は学びやすいと思う。外国人が日本人とコミュニケーションするときを使うことも有効だろう。ただ、日本人が外国人に「やさしい日本語」で話すのは大変だと思う。

参加者：文化的な蓄積があり、その深さで理解し合うことが必要だと思うのだが、「やさしい日本語」でそれができるのだろうか。

参加者：日本人が話す日本語は、外国人にとっては難しい。初学者にとってはなおさらで、外国人とコミュニケーションをとっていると、自分の日本語の難しさに気づく。自分の経験上、「やさしい日本語」を促進していこうとする背景は理解できる。

参加者：たしかに生活する上で周知等に活用するには有効だと思う。

事務局：日本に住み、訪れる外国人が用いる言語は膨大であり、ひとつひとつを翻訳することは難しい。英語を共通語とすることも無理があるので、日本語をやさしくしていくという考え方になっている。区としては、言葉だけでなく、外国人とのコミュニケーションスキルや異文化理解という面も含めて取り組んでいるところである。

参加者：「やさしい日本語」をきっかけとして日本語に興味を持ってもらえるとよい。

リーダー：言語の壁については意見をいただけていると思うので、次の課題に移りたい。

事務局：前回までの意見交換や事前にいただいた意見では、「日本人に外国人を受け入れる態勢が整っていない」と「外国人が生活習慣を知らない」という課題が挙げられている。この2点が柱になるように思うが、いかがか。

参加者：日本人の受け入れ意識はそれほど低いわけではないのではないか。

参加者：大学も今は外国人が多くなっているが、学生の立場ではどのように感じるのか。

参加者：大学でも排他的な感じではないと思う。ただ、地域で近所に住んでいる外国人とコミュニケーションをとらないということはあると思う。また、日本人同士でもコミュニケーションが不足している部分はあると思う。

参加者：最近は小学校にも外国人の生徒は増えてきているので、抵抗はないと思う。ただ、英語が話せないとコミュニケーションで困ることはある。

参加者：世代間でギャップがあるのかもしれない。

参加者：若い世代の方が垣根が低く、受け入れ意識もあるのであれば、若い人たちがハブとなつてつないでいくようにした方がよいのではないか。

参加者：ブロークイングリッシュでもいいから積極的に外国人とコミュニケーションをする人が増えるといいと思う。

参加者：「やさしい日本語」で話しかけてもいいのではないかと。たとえば若者の流行言葉のようにすれば、普及するかもしれない。

参加者：外国人が日本語で話したいというときには、「やさしい日本語」を心がけるようにしている。日本語を学びたいというモチベーションに応えることになるし、また伝わらないことでプライドを傷つけることもない。このような対応が、かっこいいと思われることはよいと思う。

- 参加者：受け入れ意識が低いことが課題になることは少し違うように思うが、挙げられている課題のうち、交流機会の少なさは気になっている。ただ、問題は機会の有無ではなく、1つの交流機会をきっかけとした継続性である。交流が継続していかないことが課題ではないか。
- 参加者：単体の交流機会においては受け入れ意識は高いと思う。ただ、その交流機会をきっかけとして継続的につきあっていくことはハードルがあるように思う。
- 参加者：継続的に接することができないということか。
- 参加者：イベントでは勢いで接点を持てるが、生活場面となると難しく感じる。
- 参加者：生活様式の違いについては、やはり近隣住民としては気になることも出てくるのでは。トラブルが起こったりすると、よい関係を続けていくことが難しくなる。
- 事務局：「受け入れ意識が低い」ことが共通認識とならないようであれば、課題としては取り下げてもいいと思う。
- 参加者：それよりも交流が一過性のもので、継続しないことを課題にした方がよい。
- 参加者：交流機会を単発ではなく、何度か続けていくとよいのではいか。
- 参加者：日常的に外国人と会話していくことになると、やはり「やさしい日本語」を使う機会は増えていくと思う。
- 参加者：外国人が日本語を学ぼうとすれば壁が低くなっていくように思う。
- 参加者：「やさしい日本語」は理にはかなっているということか。
- リーダー：残りの課題としては「外国人は生活習慣を知らない」が挙げられているが、いかがか。
- 事務局：事前にいただいた意見では、生活習慣を体験的に学ぶ機会をつくることや、生活習慣を説明するルールブックの作成が挙げられている。
- 参加者：説明する上では「やさしい日本語」が有効であり、港区としても取り組んでいるところなのだと思う。
- 参加者：港区では交流の機会となるイベントは多く開催されていると思う。
- 参加者：イベントではなく、日常生活の中で、近所で継続的に教えていける関係性を築くことができるよいか。ただ、そのときにどう伝えていけばよいか。
- 参加者：「やさしい日本語」が適当なのだと思うが、気になっているのは、生活習慣の背景まで「やさしい日本語」で説明しきれぬのか、ということだ。
- 参加者：コミュニケーションで用いる言葉もそうだが、まずは関心を持てるかどうかではないか。近所の日本人と外国人が知り合い、コミュニケーションを取れるようになればよいと思う。
- 参加者：ブローケンイングリッシュでも「やさしい日本語」でも、問題は、近所でコミュニケーションをとるチャンスをつくれるか、そういう関係を築けるかということだろう。
- 参加者：子育てのような共通するテーマがあるとよいと思う。
- 参加者：外国語を話せなくてもスマートフォンの翻訳アプリを介することもできる。
- 参加者：外国に行く際には重宝している。ただ、継続的な関係を築こうとするなら、「やさしい日本語」を活用していくことになるか。
- 参加者：港区では「やさしい日本語」の取組は行っているなので、何か発展性があるとよい。
- 参加者：テーマ②は「やさしい日本語」を中心に組み立ててもよさそうだ。
- リーダー：日本における生活習慣上のルールを多言語化して、大使館や外資系企業、インターナシ

ョナルスクールなどを通じて発信するという意見が以前にあったが、これは実現できるとよいと思う。

参加者：注意書きはひとつひとつの生活場面で示された方がよいと思う。そうすると、やさしい日本語の方が適切なのではないか。

参加者：通訳に頼ってしまい、最初から日本語を学ぼうという気のない外国人も少なくない。このような壁をどのようにすればよいか。

事務局：来日した駐在員についてきた配偶者は、母語しか話すことできないとも聞く。

参加者：日本人が駐在員として配偶者を連れて海外に行くときにも同じような問題が起きると聞く。

参加者：日本語がわからなくても困らない生活環境があるという背景もある。

事務局：多言語化だけでもいけないし、「やさしい日本語」だけでもいけない。どちらかだけでは困る人が出てしまうのだろう。

参加者：港区には外国人を巻き込むイベントがあるので、そこに参加してもらおうということが大事ではないか。防災訓練等にも来てもらう必要がある。

参加者：防災訓練は日本人の参加も多くないので、外国人はさらに難しいのではないか。

参加者：港区ではこれまで議論されてきているのだと思う。その結果のひとつが「やさしい日本語」なのだろう。様々な分野で外国人を巻き込もうとしていると思うので、既存の事業を国際化に関連づけて活用するのも方法のひとつだと思う。とにかく接する機会を増やした方がいい。

参加者：日本人も、外国人と交流しようというのであれば、外国語を勉強する必要があると思う。

参加者：外国人に日本の生活習慣を知ってもらうことを目指すのであれば、まずはターゲットを外国人住民に絞るとよいと思う。その上で、港区で過ごす上で必要なルールを理解してもらえていないという課題を設定する。そして、その課題に対して、ルールをまとめた冊子や、イベント等を通じて伝えていくとよいと思う。

参加者：外国人が住民登録する際にルールブックを渡せばよいのではないか。

参加者：ただ渡しても読んでももらえないのでは。

企業では外国人社員に対する密な研修を行っているが、地域では近所で教えるような仕組みにはなっていない。これまでの取組で上手くいかないなら、方法を変えるのもよいかもしれない。

参加者：複数のチャンネルで伝えていく必要があるだろう。

参加者：飛行機の機内で緊急時の対応を説明する動画が歌舞伎とコラボしたもので、つい見てしまうようなコンテンツだった。生活習慣を伝える際にも、つい見てしまうようなコンテンツを考えてみてはどうか。

事務局：言葉で上手く伝えられないのであれば、ビジュアルコミュニケーションは有効だろう。

リーダー：今回でテーマ②の意見交換はひと通り終わることができたということで良いか。

今日の議論を事務局でまとめてもらいたい。

事務局：まず将来像に関しては、垣根が「低い」ということが共有された。垣根がないのではなく、節度を持った垣根のあり方があるということ。将来像と現状とのギャップとしての課題は、言葉の壁と、外国人が日本の生活習慣を知らないこと、交流機会が継続的な交流に展開しないことにまとまった。日本人の受け入れ意識については、議論のなかでは

取り上げないという結論となった。

今回、これら課題の対応策としてよく言及されたのは「やさしい日本語」である。議論の中では、何でも「やさしい日本語」で伝えればよいのかという意見もあったが、生活習慣を伝える際や最初のコンタクトは「やさしい日本語」が望ましいとなった。「やさしい日本語」から徐々に言葉を習得していくということ、そして日本人が外国語を学ぶことが双方から壁を超えることになるという意見もあった。

外国人が日本の生活習慣を知らないことについては、体験的に学ぶ機会やルールブックの作成などが挙げられた。そのなかで、外国人が「つい見たくなる、読みたくなるようなコンテンツで発信すると効果的だ」という意見が出された。また、近所や地域において住民同士で外国人に生活習慣を教える関係づくりについても意見があった。

参画と協働については、たとえば、地域で生活習慣を教える関係づくりは、住民が直接関わることなので、参画と協働に該当する。

リーダー：すべての項目について話し合えたようなので、ここでテーマ②の意見交換を終えたいと思う。

3 テーマ「文化・芸術に触れる機会の創出」について

資料5をもとに事務局が説明を行った。

4 その他

次回（第7回）グループ会議についての確認

【日程】12月18日（水曜）

【会場】港区役所9階 911会議室

（閉会）

リーダーが第6回グループ会議の閉会を告げ、終了。

以上

みなとタウンフォーラム
国際化・文化グループ（第5グループ）

会議録（第6回）

■開催日時・場所・出席者

日時：令和2年1月15日（水）18時30分～

会場：港区役所9階 913会議室

メンバー：4名（4名欠席）

事務局：4名（対応部門関係課長1名（国際化・文化芸術担当課長）、企画課担当1名、サポートメンバー1名、委託事業者1名）

■次第

（開会）

1 テーマ「文化・芸術に触れる機会の創出」について

（1）意見交換

①「よいところ」「充実すべきところ」

②将来像について

③課題について

2 テーマ「国際都市の実現」の提言について

3 テーマ「相互理解の促進」の提言について

4 その他

（閉会）

■配付資料

資料番号	資料名
1	テーマ③導入
2	テーマ①提言案
3	テーマ②提言案
4	提言に向けた今後の進め方について
参考資料	第5回グループ会議 議事録（案）

■貸与資料

資料番号	資料名
1	港区基本計画

■会議要旨

(開会)

1 テーマ3「文化・芸術に触れる機会の創出」について

(1) 意見交換

文化芸術に関する施策に対する質問応答を行い、テーマ3の議論に移った。

事務局：文化芸術分野全般について確認したいことはあるか。

参加者：どのような方針で事業を実施しているのか。たとえば、外部から事業提案があった場合はどのように判断するのか。

事務局：事業提案があった場合は個別に判断している。大使館から提案があった場合には基本的には事業協力ということになる。事業予算が事前に決まっていることなので、何でも実施するというわけではない。文化芸術活動の団体助成は自治体の中でも比較的多くやっている方だと言える。

参加者：助成制度はどのようなものがあるのか。

事務局：助成制度は主に2種類ある。ひとつは文化芸術活動サポート事業で、10年以上前から行っている。育成という視点で区民の文化芸術活動を助成するものだが、専門家の評価員からのアドバイスを受けられるようにしている。もうひとつは東京2020大会に向けた文化プログラムの助成事業がある。

参加者：民間事業者の観点からすると、目玉的な事業をつくって、予算を集中的に投下した方が効果的なのではないかと思う。その方が、港区ならではの色が出せるのではないか。

参加者：助成をするにも、重みづけが違うという考え方はあると思う。

参加者：助成をしたことで団体として成長していくということが見える化されるとよいと思う。行政としても助成した理由になると思う。

参加者：活動する側と鑑賞する側の両方がある。助成事業の状況を聞くと、活動する側の支援は行われているのだと思う。ただ、鑑賞する側については、誰もが鑑賞に出かけるわけではないので、取り組もうとすると難しいのだろうと思う。

参加者：文化芸術に関心を持っていない大人に関心を持たせようとするのは難しいと思う。それなら、子どもの頃から関心を育てていくことは可能性があるのだと思う。地道に取り組まなければいけないと思う。もうひとつ、美術館でのシニア割引が少ないことが外国と異なるところである。

事務局：いただいている意見が提言内容に及んでいるので、議題に移りたい。

参加者：広報が問題になりがちだが、PRは限界があると思う。すでに多くの情報が発信されているので、広報よりも、コンテンツを議論すべきだと思う。その観点でいうと、予算を重点的に投下するような考え方があってもよいのではないか。

参加者：事業は多いが、区民は関心を持っていないというアンケート結果となっている。興味関心をどのように喚起するのが問題となるが、難しいと思う。

参加者：有名な芸術家や美術品を取り上げれば、多くの人を訪れるのだろうが、それを区ができるかという難しいだろう。

参加者：文化芸術関係の予算は、文化芸術の様々な事業にどのように配分してもよいのか。

- 事務局：港区として何らかの事業に集中することはしていない。事業計画に沿って事業予算を編成している。
- 参加者：そのように事業を繰り返していると集客のよい事業の傾向は分かってくるのではないか。
- 参加者：即効性よりも、子どもの頃から息長く文化芸術に親しむというような考え方の方がよいように思う。
- 参加者：生活のなかに溶け込むことを目指そうとしたとき、色々な事業を行うことがよいことなのだろうか。ある時期にシンボルとなる事業が行われている方が浸透するのではないか。
- 参加者：集客力のある事業を繰り返し行っていれば、徐々に鑑賞する人の輪は広がるのではないか。
- 参加者：盆踊りは生活に溶け込んでいると思う。地域によっては外国人も参加している。
- 参加者：港区には民間の文化芸術施設が多数あるが、それらと港区が競合していくのは難しいと思う。それよりも、それら施設で行っていないようなことを取り組む方がよいと思う。
- 参加者：港区には多くの芸術家が住んでいると思うが、地域行政に対する意識はそれほどでもないだろう。
- 事務局：アートなのか、地域に根付いた文化なのか。アートを指向するなら、民間や国、東京都とも競合になる。ただ、アートなら耳目を集めるので広く鑑賞してもらえるようになる。
- 参加者：区が競合をつくって頑張るとするのは不適切なのだろうと思う。また、日常のふとしたところに文化芸術があるというような状況をつくろうとする考え方にも適さない。
- 事務局：「日常のふとしたところに文化芸術がある」というフレーズはキーワードになると思う。
- 参加者：自分が退職したら歴史資源を歩いて回りたいと思うので、そのときにARのような技術でサポートしてもらえるとよいと思う。
- 参加者：港区内の歴史資源をもっと紹介してもよいのではないか。ただ、若い人向けに情報発信しないといけないと思う。
- 事務局：歴史資源に関する取組は、教育や観光の分野であり、このグループでは、少しずれてしまう。
- 参加者：港区の文化芸術振興策には区民が参画しているのか。
- 事務局：港区文化芸術振興プランを策定や見直しする際には公募区民に委員として参画していただいている。来年度にはプランを改定予定であり、それに伴ってアンケート調査を行ったが、育児・介護などがあり鑑賞の機会をつくることができないという人が多かった。そういった障壁があるのであれば、解消するべきだと思う。
- 参加者：介護している人が文化芸術を体験することは効果があると聞く。
- 事務局：最近分野横断的な文化芸術のあり方があるとは言われている。福祉分野で文化芸術をツールとして用いることがあるようだ。
- 参加者：一流のコンテンツなのか、草の根の活動なのか。両方必要だと思うが、狙いがあった方がよいと思う。
- 参加者：色々取り組んできたにもかかわらず、関心のない人もいるということであれば、効果については検証しないといけないだろう。
- 事務局：今日欠席の方から事前に意見をいただいている。文化芸術に取り組んでいる区民の活躍の場をつくると、文化芸術振興が活性化するのではないかという趣旨である。文化芸術活動をしている区民は多いので、参画を促進して欲しいという意見だと理解している。

- 参加者：そういったことがあると活性化していくだろう。そのような取組のなかで全国区の作家が育っていくとよいと思う。
- 参加者：芸術家と一緒に創作体験ができる事業も港区では行われている。自分も参加したが、たいへんよかった。その経験からすると、港区で活躍している芸術家を中心として、創作活動をしているアマチュアが集まり、指導・評価してもらった上で、区民の前で発表できるような交流ができるとよいと思う。創作活動のすそ野も広がるし、参画にもなる。
- 事務局：地元の参加が文化芸術振興にかかわることがあるが、港区では一流の方がかかわる可能性があるということは強みかもしれない。元々、生活のなかで触れ合うということを考えると、地元に住む芸術家と交流できるというのもよいことだと思う。
- 参加者：KISSポート財団は区とどのような関係なのか。事業は自主企画なのか。
- 事務局：KISSポート財団は区が出資する団体で、補助金も出している。自主企画ではあるが、区が目指す方向性を意識して実施している。
- 事務局：将来像までもう一息だと思うが、何を盛り込みたいと思うか。
- 参加者：文化芸術でも垣根を低くしたい。そのための方法としては、まちなかでサックスの演奏が聴けるようなことをイメージするが、日本では難しいのではないかと思う。それよりも目玉的なイベントがあり、集約されている方がよいのではないか。ハレのイベントの方が気づきを与えられるのではないか。
- 参加者：鑑賞するだけでなく、創作するようになるまでステップを踏んでいけるような機会があるとよいと思う。
- 事務局：文化芸術には鑑賞する立場と発表する立場がある。その2つの立場を行きつ戻りつ展開していけるといいということか。
- 参加者：先ほどの目玉となるようなイベントは必ずしもプロの芸術家だけでなく、アマチュアも参加しているようなイメージである。ただ、人気のあるコンテンツである方がよいと思う。そういった場があれば、忙しい人でも都合をつけて参加しようと思うのではないか。
- 参加者：プロの芸術家のなかでも発表機会を求めている人はいる。港区に住んでいる芸術家にもそういった人がおり、区とつながりができれば可能性があると思う。
- 参加者：アマチュアとプロの芸術家が交流しながら、鑑賞する立場から発表する立場に変わっていくような取組はよいと思う。
- 事務局：そのようなステップは将来像に書き込むことになりそうだ。今日の意見交換を踏まえて、将来像や課題についてとりまとめ、次回ご確認いただきたい。

2 テーマ「国際都市の実現」の提言について

3 テーマ「相互理解の促進」の提言について

事務局より、資料2と資料3に基づいて、説明を行った。

- 参加者：テーマ1の将来像のキャッチフレーズは安全・安心に焦点を当てているように読める。テーマ2は生活のルールを分かってもらうことで共生するということと理解できるが、いかがか。
- 参加者：テーマ2の将来像の文章で「受容」と「理解」という言葉が使われているが、逆ではないか。日本の生活ルールを「理解」するのではなく「受容」する方が適切だと思う。異

文化は「受容」するものである。

参加者：テーマ1とテーマ2の違いは、テーマ1が具体的な交流を通じて垣根を低くしていくことであり、テーマ2は相互の理解・受容をしていくことで垣根を低くすることなのだろう。つまりテーマ1は活動レベルで、テーマ2は概念的なことなのではないか。

事務局：テーマ1の将来像のキャッチフレーズに安全・安心と謳っているが、具体的な事業にはつながっていない。

参加者：安全・安心のためにも交流する必要があるという意見交換はなされていた。

参加者：議論のなかで災害対応のことにも触れた。ただ、どちらかという、普段から交流しておけば安心感を得ることができるので、区に住み続けることができるというようなことだったと思う。だから安全・安心には特に違和感はない。

事務局：自然と交流できることが安心感につながるという考え方なのか。つまり、安全・安心のための交流というのもあり得るのか。

参加者：結果として安全・安心が確保されるということなのかもしれない。

事務局：議論を思い起こすと、普段から交流していると安心感が得られ、そういった状態であれば災害時にも不安になることはないという話ではあったと思う。そのなかで情報は安全・安心に必要なだという結論にはなった。

ただ、その経緯を踏まえないまま将来像を読むと、なぜ安全・安心なのかと思われてしまう。どうしても災害や犯罪を想起させる言葉なので、意図がうまく伝わらないかもしれない。

参加者：安全があるために混乱を招くのではないか。安心は必要だと思う。

参加者：安心だけでよいかもしれない。心理的な安心を実感できるまちは望ましい。

事務局：「交流を通じて安心感を得られるまち」というニュアンスのキャッチフレーズがよいかもしれない。

参加者：具体的な事業はインパクトのあるものを考えたいところである。

事務局：情報発信についてアナログの手法を提言したのは新鮮である。しかも若い参加者から提起されたのは興味深い。

参加者：具体的な事業については引き続き考えていきたい。

事務局：提言は現状、たたき台として示している。そのため、具体的な事業は、議論いただいた内容の概要となっているが、それは議論を通じて具体化してってもらいたいという意図もある。ぜひ次回までに検討いただきたい。

4 その他

次回（第7回）グループ会議についての確認

【日程】1月27日（水曜）

【会場】港区役所9階 911会議室

（閉会）

リーダーが第6回グループ会議の閉会を告げ、終了。

以上

みなとタウンフォーラム
国際化・文化振興グループ（第5グループ）

会議録（第7回）

■開催日時・場所・出席者

日時：令和2年1月29日（水）18時30分～

会場：港区役所9階 911会議室

メンバー：5名（3名欠席）

事務局：4名（対応部門関係課長1名（国際化・文化芸術担当課長）、企画課担当1名、サポートメンバー1名、委託事業者1名）

■次第

（開会）

1 テーマ「文化・芸術に触れる機会の創出」について

（1）意見交換

①将来像

②課題、取組の方向性

③具体的な事業

④参画と協働の推進

（2）まとめ

2 テーマ「国際都市の実現」の提言について

3 テーマ「相互理解の促進」の提言について

4 その他

（閉会）

■配付資料

資料番号	資料名
1	テーマ③まとめ
2	提言書（案）
参考資料	第7回グループ会議 議事録（案）

■貸与資料

資料番号	資料名
1	港区基本計画・港区実施計画

■会議要旨

(開会)

1 テーマ3「文化・芸術に触れる機会の創出」について

(1) 意見交換

事務局より、資料1に基づいて、説明を行った。

参加者：将来像は、「区民の大半が生活の中で文化芸術の中に触れることができると同時に、楽しむことができる」ということだから、色々と展示などで実際に楽しんで、触れてもらえばいいということか。

参加者：今でも触れる機会は結構あるが、興味がある人が少なく、あまり皆が触れられるという状況でない。だから一つにはイベントをたくさんやることと、もう一つは区民の意識を芸術に向けさせなければいけない。将来像としては結構大変だし、港区だけでやってもどうかと思う。港区が取り組む範囲も考える必要があるだろう。

参加者：前回の会議では色々と意見が出たが、観る側とする側の意見がある。両方の意見を包含できればよいが、何らかの整理をした方がよいと思う。

参加者：文化芸術に「触れる」ことは、観るだけでなく、する方も入るのか。その点を明確にした方がよいということか。

リーダー：今日でほぼ固めないといけないので、方向を絞った方がよいのではないか。

参加者：ポイントとして、「にぎわうまち」を志向しているのか、「はぐくむまち」を志向しているのか。「はぐくむまち」だとする方の視点が強くなるのではないか。「にぎわうまち」だと観る方だろう。

事務局：前回の会議では、目玉的なイベントを定期的に繰り返しやっていくうちに、観る人が増えていくのではないかという意見があった。意見をふり返ると、そのイベントはアマチュアの出し物があってもいいということだったと思う。そういった意見を踏まえると、観る側とする側は両立するのではないか。

参加者：人数として多いのは観る方だが、する方を無視する必要はない。

参加者：「楽しむ」という言葉でどちらも当てはめることができるのではないか。

参加者：具体的な取組を考えていくと、観る方の話とする方の話がどう入れ込めるのかが分かるのではないか。

事務局：提言の大きな枠が「生活の中で触れることができる」という方向性であれば、先に方法論を考えることもできる。

参加者：「触れる」だけでなく、「楽しむ」という言葉は入れた方がよい。

参加者：「触れることができる」だけでは、イベントが増えればよいというだけになってしまう。それに対して区民が反応しないといけない。

参加者：先ほどの目玉的なイベントは、区が主催するイベントや区内の文化活動が集結する甲子園のようなイメージを持っていた。ただ、区が行う意義を掘り下げないといけないと思う。区のよさを生かすということであれば、それは人材なのだと思う。

参加者：提言として必要なのは、ソフトの提案なのではないか。

リーダー：まったく新しいものよりは、既存のイベントを融合するなど、少し変えるようなアイデ

アがあるといいと思う。もう少し具体的に話ができるとういが、何かないか。

参加者：「垣根のない」というのを会議が始まった当時は話していたと思う。

リーダー：キャッチフレーズについては、現状や課題について話し合ったあと、あらためて話し合いたい。

事務局：これまでの意見交換を踏まえると、イベントは多いが、区民が十分に楽しめていないというギャップがあるということか。

参加者：文化芸術に対する敷居が高いということもあるだろう。関心がある人はイベントに参加していると思うが、関心のない人は行かない。関心のない人が興味を持ってくれるように、目玉的なイベントを意見として出した。

参加者：イベントは既にたくさん行われているので、課題はどうやって触れるのかということだろう。関心のなさや敷居の高さを緩和することが大事である。

参加者：これまで文化芸術のイベントに参加してこなかった人をひきつけるにはどのようにしたらよいか、考えるべきでは。

参加者：介護や子育てで参加できない人へのアプローチも議論になった。

事務局：関心のある人は多くのイベント情報のなかから選ぶことができるのだろう。ただ、関心のない人はどれを選んだらよいか分からない。一堂に会するイベントがあると入りやすいという整理の仕方でよいか。

参加者：やはり、子どもの頃からそういうのに慣れていかないと、なかなか変わらないのかなという気がする。ただ、大人も関心を持っていない人をそのままにしておくわけにはいかない。そういった人にアプローチする方法を考えないといけない。

事務局：コンテンツの側が人の方に行くイメージではないか。

参加者：大人向けにも必要だと思う。息の長い取組になると思うが、地道に努力しなければいけないのだと思う。

参加者：大人の人たちはそういう事を地道にやっていって、少しでも対象を増やしていくしかない気がする。

参加者：原点に戻ると、将来像については、生活の中で気楽に芸術に触れるとか、楽しめるようになるということになる。現状は、何もないわけではなくて、様々な取組がある。それをもっと気楽に楽しめるような、提言というか仕組みを作りましょう、という事になってくる。

参加者：港区には様々な文化芸術のコンテンツがある。それを選定して示せるとよいと思うが、それを区民参画でやっているというのがよいと思う。コンテンツはたくさんあるので、それをどのように示すのかということを考えるべきだろう。

リーダー：具体的な事業について議論を進めたい。

関心を持っていなかったが、観てみたらよかった、そして関心を持つようになったという例はあると思う。そのようなときに人生が豊かになり、深まるのだと思う。そういったことが起こることは、港区としても、区民としても喜ばしいことだと思うので、そのための仕組みが必要だと思う。

イベントに参加した人たちにアンケートをとり、もう一度開催してほしいと思うものを選んでもらってもよいのではないか。

参加者：区民目線で選ばれることがよいのではないのか。

- 事務局：これまで、生活の中で文化芸術に触れるということを経験として考えてきたが、それは手段だったのではないか。そう考えると、取組の方向性に位置づけなおしてはどうか。その上で、文化芸術が楽しいものだと思いき、人生を豊かにするという経験を将来像としてみてはどうか。これまでは手段が目的になっていたのに、具体的な事業にまで掘り下げることが難しかったのだと思う。
- 参加者：行政としては、港区に住んでよかったという区民が増えることが望ましいと思う。そのために文化芸術の垣根を低くしようということなのだと思う。
- 事務局：文化芸術を楽しんで、人生を謳歌している人や、よりよい生を生活している人が多いということが望まれる姿なのかもしれない。
- 参加者：イベントはすでに多数実施している。あとは区民がイベントに参加することである。そうすると、どのように参加してもらうのかということを考えればよいことになる。
- 参加者：区が取り組む意義は、格差をなくすことではないか。イベントを行っているのに、参加できている人とそうでない人がいる。
- 参加者：やはり広報の話になってしまうか。
- 参加者：繰り返しになるが、イベントのあり方なのではないかと思う。
- 事務局：例えば、毎週末は広場でコンサートが行われていたり、秋になれば大規模なアートイベントがあるというような、まち全体のサイクルに文化芸術のイベントが組み込まれているようなイメージで話されていたと理解している。
- 参加者：区の施設で施設利用者の発表会をフェスティバルとしてやってはいるが、なかなか集客ができる内容ではないように思う。
- 参加者：イベントでは必ずアンケートを取るが、そのときに再開催希望を募り、結果のよかったものをもう一度やるというような考え方はないか。
- 参加者：先ほどの目玉的なイベントに出演できる演目を区民参画で選定しようということか。満足度が高いものが自動的に選ばれるのは分かりやすい。
- 参加者：パトロンになる感じにも近いかもしれない。目玉的なイベントについては、複数の分野やプロとアマチュアが交流することで新しい反応が生まれるのではないかと期待できる。
- 事務局：これまでの議論をまとめると、イベントはたくさん行われているが、垣根の向こう側であって、その壁を乗り越えられない人がいることが課題との認識である。関心のない人が壁を乗り越えることを促すよりも、文化芸術のコンテンツを壁の外に出す方が効果的と言える。そのやり方は2つあって、壁の中で行われていることの中から選ぶ方法と、壁の外でプロとアマチュアが一緒になってつくるというやり方がある。前者について、アンケートなどを用いて区民参画で選ぶというのはよいことだと思う。
- 参加者：意見が集積されていくことがよいと思う。新しいイベントをやるというよりも、既存のイベントをどのように生かすのかということ考えた方がよいように思う。
- 事務局：アンケートの回収率は悪くはないが、全員が全員書いてくれるわけでもない。
- 参加者：アンケートが生かされると可視化されれば積極的な回答が出てくるのでは。
- 参加者：「参画と協働について」が難しいと感じていたのだが、アンケートで事業を選定するというような関わり方があるとよいと思う。自分の意見が取り入れられることはうれしいだろう。

- 事務局：出演者の側に立つと、評価が可視化されることは喜ばれないかもしれない。
- 参加者：上位だけ発表するのはいかがか。
- 事務局：壁の外に出すコンテンツを選ぶ際に、参加者が選んだトップテンみたいなものがあると指標としては分かりやすいと思う。
- 参加者：レビューをしてもらうという考えは良いと思う。
- リーダー：前回参加されていなかった方に新鮮な意見を聞いてみたいが、いかがか。
- 参加者：ここで話している文化芸術は、何か明確な定義がなされているのか。
- リーダー：あまり細かくは定義せず、広く文化芸術を捉えているが、今回は、音楽や美術展示等、いわゆるアートの視点で議論をしている。
- 参加者：港区では官民ともに、また学校においても公立・私立を問わず、文化芸術の取組は多数行われている。そのような取組が行われているということが、区民に伝わるということが第一なのではないか。
- 参加者：イベントは多いが、それが伝わっておらず、参加できていない人がいることが課題としては挙がっている。
- 参加者：港区には文化芸術に触れる機会が多いということは、お金をかけてでも周知しないといけない。他の区では観られないものも、港区でなら観ることができるということを知らしめれば、人は集まってくるのではないか。
- 参加者：区民向けということにはならないのではないか。また、そういった大規模に集客するイベントを、必ずしも港区がやらなくてはいけないとも思わない。地道に取り組んでいくことが大事だと思う。消極的な言い方で申し訳ないが、即効性はないと思うので、徐々に増やしていくことが望ましい。
- 参加者：消極的というよりも、現実的な意見だと思う。
- 参加者：提言したといっても、一気に変化するわけではない。
- 事務局：令和8年の将来像なので、即効性は求めている。
- 参加者：少しでも増やしていける策を色々考えてみるということでもいいのだと思う。
- 事務局：将来像について整理すると、国際化のテーマでは「〇〇なまち」と結ぶような意見が多かったが、「〇〇な人が増える」というような言い方でもよいのではないか。そうすると、「文化芸術が楽しいということに気づき、それで喜びを得ている人が増えて、港区に住んでいてよかったと思う」というような時系列を踏んだ将来像も可能性が出てくる。今日の議論では目的が見えてきたように思うので、提言も書ける段階になってきているのではないか。
- リーダー：ゴールを示すのではなく、プロセスというか、向いている方法を示すような提言も良いと思う。
- 参加者：文化芸術は港区でなくても触れることはできる。でも、港区は他に比べてもたくさんのコンテンツがあり、イベントも多いということを知らしめて、実際に行動してもらえるようになることが望ましいのだと思う。
- 事務局：日常的に文化芸術に触れることができるという線で話をしてきたが、これはアクションである。アクションが将来像になっていたので、具体的な事業を検討する際に深みにはまっていたと思う。それが今回、文化芸術を通じて住んでいてよかったと思われるまちというような話に展開していった。結果、日常的に文化芸術に触れることができるとい

うことが取組の方向性となり、具体的な事業として垣根の外にコンテンツを持ち出すということに話が至っていると思う。

参加者：触れることがたくさんできるのも必要だし、それを楽しむ人が増えてくるというのも必要だと思う。将来像は両方ないといけない。

参加者：港区は公園などとてもたくさんあるので、その間にちょっとアートのものがあるというと思う。

リーダー：ではそろそろまとめて欲しい。

事務局：将来像は、生活の中で文化芸術に触れられる機会を増やしていくということと、それを通じて文化芸術を楽しんで、人生が広がってまちに住んでいてよかったと思う人が増えるということだと認識している。ただ、問題としては垣根があるということであるが、そのための方策としてコンテンツを垣根の外に出すということが挙げられた。既存のイベントを集約した大規模なイベントを行ってもよいし、プロとアマチュアが交流しながらコンテンツをつくるという方法もあるだろう。いずれにせよ、公共的な空間でイベントを行うことが必要にはなってくる。とにかく一朝一夕ではできないので、地道に取り組んでいこうということも確認された。

リーダー：キャッチフレーズは今日決めきれないので、次回までの宿題にしたいと思う。

事務局：それがよいと思う。テキストでいくつか案を出した中で決めるのがよいと思う。

2 テーマ「国際都市の実現」の提言について

3 テーマ「相互理解の促進」の提言について

事務局より、資料2に基づいて、説明を行った。

リーダー：テーマ2はキャッチフレーズを決めるのか。

事務局：できればお願いしたい。

リーダー：テーマ3も含めて、次回で全部仕上げるのか。

事務局：次回が最後となる。内容を確定させた後、文言について微調整がある場合はメール等で情報共有させていただくが、最終的にはリーダーに一任していただく形になる。

事務局：テーマ3の提言書案に関しては、はやめにご覧いただくようにする。

リーダー：「提言にあたって」はどのように考えるべきか。

事務局：「提言にあたって」は、テーマの選定理由や議論の経過を記載している。テーマを横断して書けるのはここだけなので、テーマ1とテーマ2が表裏一体であることを書いてもよいと思う。

リーダー：それでは、次回までに考えてくるようにする。

事務局：キャッチフレーズも、終了時刻が迫ってきているので持ち帰っていただいた方がよいかもしれない。

リーダー：そのようにした方がよいと思う。次回までに考えてくるように皆さんにお願いしたい。

事務局：考えてきてもらいたい事項をまとめてメールで連絡するようにする。

(閉会)

リーダーが第6回グループ会議の閉会を告げ、終了。

以上

みなとタウンフォーラム
国際化・文化振興グループ（第5グループ）

会議録（第8回）

■開催日時・場所・出席者

日時：令和2年2月12日（水）18時30分～

会場：港区役所9階 915会議室

メンバー：2名（6名欠席）

事務局：4名（対応部門関係課長1名（国際化・文化芸術担当課長）、企画課担当1名、サポートメンバー1名、委託事業者1名）

■次第

（開会）

1 テーマ「文化・芸術に触れる機会の創出」について

（1）意見交換

①将来像

②課題、取組の方向性

③具体的な事業

④参画と協働の推進

（2）まとめ、提言について

2 テーマ「国際都市の実現」の提言について

3 テーマ「相互理解の促進」の提言について

4 その他

（閉会）

■配付資料

資料番号	資料名
1	提言書（案）
参考資料	第7回グループ会議 議事録（案）

■貸与資料

資料番号	資料名
1	港区基本計画・港区実施計画

■会議要旨

(開会)

1 テーマ3「文化・芸術に触れる機会の創出」について

(1) 意見交換

事務局より、資料1（該当テーマ部分）に基づいて、説明を行った。

議論は一通り終わっているため、事務局でまとめた提言書案を確認する形で進めていくこととした。

参加者：港区の行政は文化芸術の意識を持っている。そのような姿勢をもっとアピールすると思う。現在行っている事業もよいものがあるので、それを活かしてもらいたいと思っている。

事務局：今日は、まず将来像のキャッチフレーズから決めていただきたい。事前の意見聴取では、「だれもが芸術家になれるまち」と「日常のなかに芸術を」という2つの案がある。いまの意見を踏まえると、前者になるか。

参加者：将来像は、芸術と人の間の垣根を低くして、多くの人が触れる機会を増やすという趣旨であることを踏まえるべきか。

参加者：芸術を鑑賞することもできるし、創作する側にもなれるということも壁を超えるということだろう。

事務局：前回の会議での議論をまとめると次のようになる。芸術は美術館やホールの壁のなかにある。壁を越えられる人は豊かに暮らせるが、そうでない人もいる。だからといって壁のなかに入ってもらうのは難しいので、壁の外側に芸術を出そうという話になった。それが「日常のなかに芸術を」というキャッチフレーズに表れていると思う。一方、文化芸術を鑑賞したり、創作・発表したりするようになるにはステップを踏まないといけないという話もあった。

参加者：芸術家というと大げさに聞こえがちだが、「だれもが芸術家になれるまち」というフレーズ自体はよいと思っている。

事務局：「だれもが芸術家になれるまち」と冒頭に書くことで、芸術というものの垣根が低く感じさせることはできるようなと思う。

参加者：実際にプロの芸術家といっしょに創作・発表できる事業もあるので、施策にも合っているように思う。

事務局：ただ、創作する側からの視点だけにも見えてしまうが、鑑賞する人の視点も盛り込もうとすると、偏りがあるようにも思う。

参加者：鑑賞する人たちは、日常のなかで芸術に触れているということになるので、「日常のなかに芸術を」がよいように思う。

リーダー：それでは、これまでの意見を踏まえて、「日常のなかに芸術を」に決めたいと思う。

事務局：続いては、具体的な事業について確認していきたい。

オープンスペースでの事業実施については法令等の制約もあるので難しい部分もあるが、可能な限り実現できるようにしたいと考えている。

参加者：そういった事業があれば、子どももさらに増えるのではないか。

事務局：たしかに芸術に触れる機会があることは、住む場所として選ぶ理由の1つになると思う。

- 参加者：親子連れで参加できるという要素を盛り込んでどうか。子どもと一緒に参加するという人も少なくないと思う。
- 事務局：提言案に追記する。追って文案を確認いただく。
- 事務局：アーティストを育成するという意見はどのように提言に盛り込んでいくか。
- 参加者：自分としては具体的な事業に盛り込めるとよいと思う。
- 事務局：育成するだけでなく、育成とともに、区民の鑑賞機会ともするというような趣旨で書き込むとよいように思うが、いかがか。
- 参加者：それでよいと思う。若いアーティストは活動する機会が増えることは望ましいと思うので、ウィン・ウィンなのではないか。
- 事務局：実際に実施することを考えると、アーティストの範囲の捉え方や公募した際にどのように選定するかが課題となってくる。鑑賞する区民からすると、レベルが高いほうが良い。
- 事務局：区では文化芸術団体の活動を助成する事業がある。アドバイザーもつけて、団体の育成という観点で行っている。港区内で活動する団体なので、区民の鑑賞機会にもつながっているとと思う。
- 参加者：それが広がり、区民に伝わるとよいと思う。具体的な事業でも書き込むとよいと思う。
- 事務局：参画と協働についてはいかがか。
- 参加者：参加者を広げるための方策という理解でよいか。
- 事務局：事業の実施にどのように区民がかかわるかということを検討いただきたい。たとえば、先ほどのアーティストや団体を区民が選定するといったことがあると思う。
- 参加者：そういったことがあれば選ばれるアーティストにも幅が出るかもしれない。
（「文化・芸術に触れる機会の創出」について、議論を踏まえて提言書の記載内容を確認）

2 テーマ1「国際都市の実現」の提言について

事務局より、資料1（該当部分）に基づいて、説明を行った。

- 事務局：テーマ1「国際都市の実現」に関する提言では、当初、安全・安心、垣根、自然な交流という3つのキーワードで考えてきたが、安全・安心は安心だけに絞り、垣根は「相互理解の促進」で取り上げることとなったので、こちらのテーマからテーマ2へ移した。
- 事務局：具体的な事業で挙げている「テーマ性のある交流機会」の「テーマ」について具体的なイメージができるような記載をするために意見をいただいたが、社会課題にかかわるものやスポーツを挙げていただいているところである。
- 参加者：ラグビーでは外国人が日本代表となることができるが、よいことだと思う。スポーツにかぎらず、外国人と一緒に何かに取り組むことは日本人の力を引き出すこととなる。港区はそういったチャンスが多いので、生かしていただきたい。
- 事務局：趣味でつながることもよいが、何か具体的なアクションがある関係性の方が密度が高くなると思う。
- 参加者：日本語を学ぶ教室に来ている外国人も、交流することになれば密度は高くなると思う。
- 事務局：そういった交流をするときに用いる言語は何になると思うか。
- 参加者：やさしい日本語を使うのは無理があるか。やはり、まずは英語にならざるを得ないだろう。

事務局：英語になりがちだと思うが、日本人にとってはそこで臆してしまう。だが、外国人からすると、日本語でないといけないというのも交流しにくいだろう。そこにハードルがあるように思う。

参加者：外国人と接していると文法などの細かいことは気にしなくなってもくる。

参加者：スポーツであれば言葉がそれほど必要なくなる。そういった機会から慣れていくこともできるのではないか。

参加者：港区には英語ができる人、英語で話したい人も少なくないのではないか。いずれにせよ外国人と接する機会をつくるのが大事だろう。

（「国際都市の実現」について、議論を踏まえて提言書の記載内容を確認）

3 テーマ2「相互理解の促進」の提言について

事務局より、資料1（該当部分）に基づいて、説明を行った。

事務局：テーマ2「相互理解の促進」の将来像のキャッチフレーズを決めるべく議論いただきたい。事前にいただいた案として、「ストレスフリーな共生社会」、「国籍の垣根をより低く」、「日常にさりげない調和」をいただいている。

参加者：「日常にさりげない調和」は国際化のイメージが感じられない。「国籍の垣根をより低く」の方がグループに適していると思う。

参加者：2つを組み合わせてもよいかもしれない。直接つなげると「国籍の垣根をより低く、日常にさりげない調和」になる。

事務局：「さりげない」というのは、自然ということか。

参加者：以前に、外国人が外国人であることを意識しない状態が究極だという議論がなされた。

参加者：「国際調和」というと変だろうか。「自然な国際調和の実現」など、いかがか。

参加者：造語だと思うが、よいと思う。

事務局：「国際調和」という言葉は、関心を引くのではないか。

参加者：キャッチフレーズで「国際調和」を用いることは、よいと思う。

事務局：最後に、テーマ2の課題に、外国人が日本の生活上のルールが十分に認識していないことを挙げているが、どういったルールが認識されていないのか提言書に例示としていくつか盛り込むと具体性が増すように思うので、意見をいただきたい。

参加者：信号などの交通ルールを守らないことや行列の並び方が挙げられる。

参加者：ごみの分別と交通ルールを載せるのが良いのでは。

事務局：その2つを提言に盛り込むようにする。

（「相互理解の促進」について、議論を踏まえて提言書の記載内容を確認）

事務局：提言の内容は今回全て確認できたので、細かい言い回しなど文言について、事務局で整理した上で、リーダーの確認を経て、メンバーの皆さんに確認する。

4 その他

事務局より、資料1（「提言にあたって」部分）に基づいて、説明を行った。

リーダー：「提言にあたって」の文章を考える上では「垣根」という言葉は気になっていた。これ

までの議論でよく「垣根」という言葉が出てきた。「垣根」をキーワードとして位置づけるほか、自分たちの議論も「垣根を越える」という表現を用いた。

事務局：「垣根」は、キーワードというよりも、コンセプトとして捉えた方がよいかもしれない。

リーダー：たしかに「垣根を越える」をコンセプトとする方がよさそうなので、その言い方にしたい。

事務局：最後に提言式で発表する人を決めていただきたい。

リーダー：自分はフラットという言葉が好きなのだが、自分以外にも1人、プレゼンテーターになってもらいたい。

(リーダーとメンバーもう一人で行うことに決定)

事務局：発表については、別途打合せをさせていただきたいので、事務局から連絡をする。

(閉会)

リーダーが第8回グループ会議の閉会を告げ、終了。

以上